

函大商学論究

第17輯 第2号

昭和57年 3月

論 文

幕末における松前藩の大坂蔵屋敷をめぐる諸問題

—幕府の蝦夷地再直轄と松前藩の

財政経済政策との関わりを中心に—

..... 榎 森 進 (1)

研 究 ノ ー ト

経済学, 常識入門

— (その1) —

..... 荒 木 秀 弥 (77)

函 館 大 学 商 学 部

幕末における

松前藩の大坂蔵屋敷をめぐる諸問題

——幕府の蝦夷地再直轄と松前藩の
財政経済政策との関わりを中心に——

榎 森 進

はじめに

1. 大坂蔵屋敷の再興と森歎兵衛
2. 蔵屋敷運営の概要 ——森家文書を中心に——
3. 蔵屋敷をめぐる諸問題
 - a. 安政期の松前藩の財政経済政策の特質
 - b. 領主蔵米の調達と東根領年貢米
 - c. 産物会所の設置と国産物の直捌

まとめにかえて

はじめに

兵農分離制・石高制・鎖国制を社会編成原理とする幕藩制社会において、全国の多くの諸藩が年貢米および国産物の販売を目的として中央市場である大阪に蔵屋敷または用聞（用所）を置いていたことは周知のとおりである。そして、この大坂蔵屋敷の問題は、単に中央市場としての大坂の経済動向のみならず、幕藩制社会の経済構造ないしは幕藩制的市場構造と諸藩の再生産構造との有機的関連を解明する上で非常に重要な問題を内包しているだけに、その研究蓄積も多い。

しかし、松前藩の大坂蔵屋敷については、その実態を知るべき具体的史料が極端に少なかったこと、たとえば、同藩の大坂における蔵屋敷や用聞の存

在については、現在のところ『大阪府誌』第一編に、延享4年現在「奈良屋九郎兵衛」を「用聞」⁽¹⁾としていたこと、『大阪市史』附図の「大阪市史附図目次及説明」所収の天保14年「蔵屋敷表」に「阿波堀川・道頓堀川間、附道頓堀川以南」の地域に毛利淡路守廣篤（周防）、薩摩宰相齊興（薩摩）、松平土佐守豊熙（土佐）、稲田九郎兵衛（淡路）の蔵屋敷とともに松前志摩守昌廣の蔵屋敷（西国町、地図番号118の地）があったことを記しているのみで、両者に関する藩側の記録は未だ発見されていず、現存する藩側の記録で蔵屋敷の存在を確かめうるのは、後述のように安政4年の「再興」からである。さらには、松前藩の再生産基盤が、文化4年～文政4年の陸奥国伊達郡梁川への移封時や安政2年以降の松前蝦夷地における領域の縮小と出羽・陸奥両国での飛地の領有という特殊な時期を除けば、他藩のように農業生産にではなく、蝦夷地交易や漁業生産にあったこと、などの理由から、従来はこれといった関心がほとんど向けられなかったようである。管見の限り、現在のところ、この問題に関する個別実証的研究は一つもみ当らない。また、一般の通史的文献にあっても、同問題に言及しているものは、北海道史に関するものでは全くみられない。つまり、松前藩の大坂蔵屋敷に関しては、ごく断片的史料によって、その存在のみは知られていたものの、それ以上のことは何一つ明らかにされていないというのが現状である。

ところが、数年前、安政4年再興の大坂蔵屋敷の「取締方」を勤めた讃岐箱浦の廻船問屋、勝間屋森歆兵衛に関わる文書⁽²⁾が発見されたことによって、不十分ながらも、幕末における松前藩の大坂蔵屋敷の概要をある程度まで把握できるようになった。そこで、小稿では、史料紹介という意味もこめて、主にこの森家文書を中心に安政4年再興の大坂蔵屋敷の概要を整理し、幕末における松前藩の再生産構造と経済政策の特質、および幕藩制社会の流通構造との関わりに視点をおきつつ、同期の蔵屋敷の運営に内包する諸問題について若干の考察を行なってみたい。

1. 大坂蔵屋敷の再興と森歆兵衛

安政4年の大坂蔵屋敷の再興について触れる前に、再興直前の松前藩をめぐる政治経済状況の特徴について若干整理しておこう。周知のように、松前藩は近世初期以来事実上北海道全島を支配し、さらに元禄・享保期以降場所請負制度の発展をテコとしながら次第に支配領域を拡大し、18C末までには、南千島はじめ樺太の一部にまで支配の手をのばしていた。したがって、支配領域に関する限り、近世諸藩の中では最も広大な地域を支配していた藩ということになる。ところが、安政元年の箱館開港を契機に、幕府は同年6月松前藩に箱館および同地より5～6里四方の地を上知させたのみならず、翌安政2年2月には、東部木古内以東、西部乙部以北の和人地と蝦夷地全域を上知させるに至って、松前藩の領地は一瞬にして城下松前を中心とした東西わずかの城付領のみに縮小されることとなった。その後、同年12月、幕府は、松前藩に上知の替地として、陸奥国伊達郡（松前藩深川領6ヵ村、高9,110石余）、出羽国村山郡（松前藩東根領41ヵ村、高30,641石余）に3万石（込高4万石余）を給し、外に毎年18,000両の手当を与えることとし、かつ出羽国村山郡尾花沢幕府代官所領24ヵ村、高13,940石余を預所とした⁽³⁾。

ここに至って、松前藩は、形の上では従来の無高1万石格から3万石の家班となったものの、藩領は、和人地内の僅かの城付領（城下及び東西54ヵ村〈含む枝郷〉・無高）と二つの飛地に分断されたため、藩の政治経済的事情は従来とは全く異質な状態に置かれることとなったのである。特に小稿のテーマとの関わりで看過できないことは、再生産構造ないしは財政構造の著しい変化である。すなわち、従来の松前藩の存立基盤は、他藩のような土地の支配権ではなく、基本的には幕府から公認された蝦夷地交易の独占権にあっただけに、藩財政も主に場所請負人の運上金と松前三湊（松前・江差・箱館）における沖口諸役口銭によって支えられていたが、安政2年以降、蝦夷地全域と箱館を失うことによって、運上金の収入は全くなくなっただけでなく、

沖口収入にも減少を来し、財政構造は大幅に変化した。

たとえば、文化元年の松前家の1ヵ年収納の内訳を示すと表1のとおりで、

表1 文化元年、松前家1ヵ年収納高

	金	銭	計(銭)	%
諸 運 上	7,033兩2分	1,741貫434文	47,459貫184文	55.4
畑 役		88貫071文	88貫071文	0.1
村々取立物・家別取立物	15兩1分	935貫077文	1,034貫227文	1.2
船 役 類	521兩	3,229貫439文	6,947貫439文	8.1
諸 口 銭	876兩1分	20,772貫247文	26,467貫897文	30.9
旅 人 取 立 物		1,279貫500文	1,279貫500文	1.5
材 木 薪 炭 類	233兩	925貫477文	2,439貫977文	2.8
計	8,730兩	28,971貫245文	85,716貫245文	100
	金13,187兩 銭745文、金1兩=銭6貫500文			

注. 「丙辰刺綴」(東京大学史料編纂所蔵)による。

東蝦夷地の運上金及び箱館の沖口諸収納分は含まれない。

文化元年は、幕府が東蝦夷地を直轄した直後の年であるため、これには東蝦夷地の運上金および箱館の沖口収入は含まれていないものの、それでも諸運上収入が全体の55.4%、松前・江差2港での船役類・諸口銭収入が39%で、両者のみで全体の95%近くを占めている。また、「蝦夷情実」⁽⁴⁾によれば、天保9年頃の松前家の1ヵ年収納は約6万兩と推定され、内運上金・2分積金が2万兩、諸役・沖口収納が4万兩とされている。これによっても、場所請負人の運上金や“三湊”における沖口収益がいかに大きな比重を占めていたかを知ることができよう。ところが、藩領縮小後の慶応2年の財政事情(収入見込高)をみると表2のとおりで、これによると、当然のことながら運上金収入は全くなく、収納見込額112,242兩のうち、松前・江差兩沖口収納が、74,000兩で全体の65.9%を占め、次いで東根・梁川領の収益が19,300兩で、17.2%、幕府からの「御頂戴金」が17,300兩15.4%で、いわば沖口での流通

課税収入を軸に、飛地収入と幕府からの援助金が主要な財源になっており、財政構造に於て表1との間に決定的な相違が存在していることを知ることができる。ちなみに、かつて松前藩が領していた東西蝦夷地からあがる運上金⁽⁵⁾が、当時どのくらいになっていたのかをみると、慶応3年調の東西蝦夷地の運上金は、増運上金・仕向金・其他上納金を合せて65,774両余であった。つまり、松前藩の収納見込額の約58%に相当する金額が幕府及び蝦夷地分領の諸藩に上納されていたわけである。

表2 慶応2年、1ヵ年収納見込高

内 訳	金 額	%
沖 之 口 御 収 納	50,000両	44.5
当 所 市 在 諸 役	480	0.4
江 差 沖 之 口 御 収 納	24,000	21.4
江 差 市 在 諸 役	750	0.7
熊石～乙部8ヵ村御収納	412	0.4
東 根 御 廻 米	11,800	10.5
東根御収納米代金納小物成	3,000	2.7
梁川御収納米代金納小物成	4,500	4.0
御 頂 戴 金	17,300	15.4
合 計	112,242	100

上原家文書「諸用留」（『松前町史』史料編第1巻）による。元治元年、幕府、熊石～乙部8ヵ村を松前氏に還付し、手当金700両を削減。

安政4年の大坂蔵屋敷の再興は、こうした安政2年を境とする松前藩をめぐる政治経済状況の著しい変化を前提としていたところにまず留意しておく必要がある。

さて、それでは安政4年再興の大坂蔵屋敷とはいかなるものであったのか。まず「北門史綱」巻二⁽⁶⁾によって再興に関わる関係記事をピックアップすると次のとおりである。

(安政4年)
正月廿五日、柴田元勝ヲシテ大坂ノ邸倉ヲ復設シ、將ニ東根地方ノ収粟
及産出ノ物品ヲ回致シ、前途ノ国利ヲ啓理セシム

三月七日、柴田元勝ヲ東根ニ遣シ、大坂邸倉復設ニ係ル事務ヲ理セシム、
事畢テ三月廿九日江戸ニ還ル

四月廿八日、柴田元勝ヲ大坂ニ遣シ、邸倉復設ノ事ヲ理セシム

九月、柴田元勝大坂邸倉ノ復設ヲ畢テ還ル、乃チ其事ニ勉ムルヲ嘉シテ
時服二白銀五枚ヲ賞與ス

柴田元勝（矢太郎）は、江戸藩邸詰の用人であるが、明治十六年六月八日
付で宮内省に提出した「履歴書」（中島家文書⁽⁷⁾）にも、

(安政4年正月)
1、同年同月廿五日、於御前大坂御蔵屋敷御再興ニ付上坂被仰付、且羽
州御新領御収納米并出産物為御登之儀ニ付羽州東根 追出役被仰付

1、同年三月七日、此程御達ニ付東根江出役、御用向相済同月廿九日帰
府、同年四月廿八日、大坂御蔵屋敷江出役、御再興御用向無滯相勤同
年九月帰府

1、同年九月、於徳廣公之御前大坂御蔵屋敷御再興御用相勤候ニ付、以
御書取御時服式白銀五枚頂戴之

とあって、両史料の記述は一致しており、したがって、大坂蔵屋敷の再興
は、用人柴田矢太郎を中心にして安政4年正月から具体的準備にとりかかり、
同年9月までには再興事務が完了したものとみてよい。また、その目的は、
東根領の年貢米及び出産物の販売にあったことが分る。

こうして安政4年大坂の蔵屋敷が再興されたが、その場所は、森家文書に
「西浜百軒町」とあるので、天保14年時の場所とほぼ同じ所とみられる。ま
た、蔵屋敷の運営体制をみると、留守居が高崎門弥（士席御先手組、元江戸
詰⁽⁸⁾）、御取締方が森歡兵衛で、さらに屋敷詰合の役人として松田万蔵、大森金
兵衛、徳重章兵衛、青野唯七等があり、そのもとに小商人たちが蔵仲間（上
仲間、下仲間）として組織され、近江屋半左衛門なる商人が蔵元になってい
た。また、安政4年5月には酒田の間屋商人尾関又兵衛が蔵元に任命され、⁽⁹⁾
⁽¹⁰⁾

さらに下関にも御用達（村屋吉左衛門）が置かれたようである。⁽¹¹⁾

こうした体制の中で、蔵屋敷運営のために最も精力的に動いたのが御取締方の森歛兵衛である。森家の先祖は、もと勝間城主であったといわれ、その後讃岐箱浦で廻船問屋業を営み、屋号を勝間屋と称したが、⁽¹²⁾大坂蔵屋敷再興に伴ない留守居高崎門弥が丸亀藩の大坂蔵屋敷留守居小野仁右衛門宛に差出した書状に、⁽¹³⁾

以手紙致啓上候、然者其御許様御領分讃州箱浦住居御百性歛兵衛与申者、伊豆守領分松前表江廿ヶ年以前者住宅罷在、其後同人母依病氣為看病彼地世躰向取仕廻、又、御領分江立戻、老母孝養乍罷在年来松前表出稼罷在候處、此度當蔵屋舗至而人少之事故、右歛兵衛義者事慣居者之義ニ付、伊豆守方家来被雇度含有之候、然ル処、同人義迫、及老年、殊ニ近頃多病相成候間、致世話候者無之候而者不行届、依之家内共當地区江為呼登為致住居度積候得共、其御領分人別之者御座候間、若御差支筋も無之哉否御懸合、貴様迄拙者より可得御意旨江戸表より被申付趣如斯御座候、已上

十一月廿日

松前伊豆守内

高崎門弥

京極佐渡守様御内

小野仁右衛門様

とあることから分るように、彼は天保7～8年頃には城下松前に住んだこともあり、その後母親の病氣看病のため箱浦に帰るものの、安政初年頃までは依然として「松前表出稼」を続けていた人物であった。なお、同文書中には、「嘉永六年二月吉祥日、金力丸當座覚帳」、「嘉永六年丑四月、菊屋善左衛門、惣目録、金力丸歛兵衛殿」、「嘉永六癸年丑六月、船中用捨帳」、「嘉永七寅年、道具色より預け控帳、金力丸歛兵衛」なる記録があるので、表記の「松前表出稼」とは、いわゆる漁場稼ぎ等の出稼ではなく、廻船問屋を営みつつ、金力丸等の船頭として松前交易に従事していたことを指している

ものとみられる。

いずれにしても、松前藩が大坂の蔵屋敷を再興するや、いち早く彼を「事慣居候者」との理由で蔵屋敷の「御取締方」として採用したのも、歓兵衛が天保頃から松前と深いつながりをもっていたことによることは否めないが、さらにこの点で注目しておきたいことは、松前との関係は、城下の特権商人藤野喜兵衛（本店は、近江国愛知郡下千枝村藤野四郎兵衛）との密接な関係を軸にしたものであったと推察されることである。もっとも、その具体的な内容は定かではないが、同家文書中の天保十五年七月、讃岐箱浦香蔵寺観音講中「勸化帳」によると、寄附者総件数 106件、寄附総額98両 1 分 2 朱、銭 4 貫444文（他現物寄附あり）のうち、近江の藤野家を含む松前関係者は44件で、全体の約半数近くを占めるのみならず、藤野四郎兵衛はじめ城下松前の藤野喜兵衛、柏屋庄兵衛、松本金蔵、大坂の近江屋熊蔵（店印は松前店と同じく𠄎）、下ノ関の近江屋繁蔵（但し、弘化2年開店）、さらには藤野家手船関係26件など、藤野家関係と思われるものが30余件に達している。また、下ノ関の近江屋繁蔵は、

乍恐願上口上覚

江州愛知郡下千枝村柏屋四郎兵衛内私、御當所東細江松屋吉左衛門親類之者ニ御座候、此度家号近屋与仕住居致シ商賣仕度奉願上候、何卒御免被仰付候ハハ難有仕合可奉存候、然ル上者、後年松屋吉左衛門印形取付差上置申候、此段乍恐宜敷奉願上候、以上

弘化二年巳三月

井伊掃部頭領分

愛知郡下千枝村

柏屋四郎兵衛内

繁 蔵

如前書江州愛知郡下千枝村柏屋四郎兵衛内繁蔵与申者私親類ニ御座候処、

御當所江住居致シ商賣仕度段御願申出候、何卒願之通御免被仰付被下候
ハハ、於私儀も難有仕合ニ可奉存候、然上者、後年ニ至於市中出入懸り
合其外身柄ニ付如何躰之儀出来仕候とも、何時も私江可被仰付候、此段
乍憚宜鋪被仰上可被下候、奉願候、以上

月 日

東細江町

松屋吉左衛門

溝口喜左衛門殿

とあるように、弘化2年に開店した藤野四郎兵衛の出店名であるが、この
下関出店開店のことを記した「長州赤間の関出店開」（但し表紙無し）の筆
者（裏表紙に「近江屋善蔵」とあるが、本文の字体からすると歛兵衛かとも
推察される。とすると一時近江屋と称していたことになる）が藤野家を「旦
那樣」と記し、開店事務に従事していることからすれば、少なくとも天保・
弘化期頃には、藤野家と主従関係にあったものと推察される。同家文書中に
松前藩の藩船で藤野家預りとなっていた長者丸の航海日記が存在するのも、
こうした森家と藤野家との密接な関係によるものである。¹⁰⁰ともあれ、讃州箱
浦の森歛兵衛なる人物が、蔵屋敷運営上の重職たる「御取締方」に抜擢され
た背景に、彼が単に長い間「松前表出稼」をしていただけでなく、松前藩と
深い関係にあった亾藤野家のいわば身内的存在であったという事実が存在し
ていたことは注目されてよい。

ところで、先に天保14年現在、大坂に松前藩の蔵屋敷があったことを記し
ておいたが、森家文書に同期の蔵屋敷に関わる文書が一点含まれているので、
次に紹介しておく。

取為替約定一札之事

1. 松前様御領分御國産箱館₅積収鯉_ノ粕類其外諸品為御差登附左之通

1. 八百五拾石、但シ ^{四千貫目ニ付}
百石定メ

此鋪金四百貳拾五兩積処納メ無利足定

- 1, 運賃金百石ニ附金貳拾四兩手取定メ 但シ兵庫揚ケ之定
 - 1, 都而御下シ荷物諸品積所へ不参仕候節ハ, 松前相場 〆 貳割増を以御蔵屋鋪江金納ニ而御勘定可仕候可仕候定之事
 - 1, 兵庫届ケ用捨五歩之定, 同鯶八七歩定, 余者積処ニ而濱振合を以用捨御定可被下候, 掛出シ目有之候ハ、, 船手江被下候定之事
 - 1, 敷金運賃金共, 水揚蔵入相済候上御渡被下候定之事
 - 1, 若シ又積所ニ而荷物有之候処, 積方不被下候ハ、, 御定之通半運賃御渡被下候定之事
 - 1, 万々一荷物無之候時ハ, 勝手ニ出帆致, 空船運賃請取不申候定之事
 - 1, 濡・沢手・欠目・乱俵・鼠喰共, 時之相庭を以弁金可仕候事
 - 1, 届ケ所掛廻シ之儀ハ, 蔵所御手人を以立會之上御請取被下候定之事
 - 1, 積所日和待, 着日 〆 晴天廿日限り, 尤先船有之候節ハ, 碇先後, 尤雨天八日送り, 若シ日限相過積入無之候節ハ, 日附證據書を以出帆可仕候定之事
 - 1, 大坂出船 〆 着岸迄六十日限之事
 - 1, 兵庫津着船之節, 早速大坂御蔵屋鋪へ送り 状持参可仕候定之事
 - 1, 万々一海難之節, 皆無破船ハ荷主荷損船主船損, 鋪金運賃金共捨里相成申候, 相互申分無御座候, 余者大坂廻船御法可為候
- 右者此度箱館 〆 荷物積取候ニ付御雇入議定致候上ハ, 夫々ケ條之通聊相違等無御座候, 仍而議定一札取為替證文仍而如件

嘉永五年

子二月

武富熊吉

冲船頭

吉祥丸弥蔵

御産物請負

木津屋唯七殿

同船差配方

榎屋太七郎殿


これによると、安政4年再興以前の大坂蔵屋敷は、少なくとも嘉永5年迄は存続していたこと（但し設置時期は不明）、また、この期の大坂蔵屋敷の目的は、主に蝦夷地産海産物の大坂・兵庫廻漕と販売にあったものと推察されること（とすると、場所請負制度との関係が問題となるが、この点の具体的内容は不明）、さらに、その運営は、嘉永5年頃には、大坂の商人木津屋唯七に請負わせる形で行なわれていたこと、などの諸特徴を有していたことを知ることができる。したがって、こうした点をふまえれば、安政4年の再興は、再興とはいふものの、蔵屋敷そのものは、事実上それまでの蔵屋敷を再編する形で行なわれたものとみられる。蔵屋敷の場所が両者とも、ほぼ同じ地であるのも、こうした事情によるものであろう。

2. 蔵屋敷運営の概要 — 森家文書を中心に —

次に主に森家文書に依拠しつつ、再興後の大坂蔵屋敷運営の概要について触れておこう。

〈安政4年〉

大坂蔵屋敷再興の主目的が、東根領年貢米及び国産物の大坂廻漕とその販売にあったことは先にみたとおりであるが、松前藩は、蔵屋敷を再興するや、いち早く東根領年貢米の大坂廻米に着手している。すなわち、安政4年閏5月付の大坂廻米約定書（前文欠）に、

- 1、彼地積間屋と其次第書付ヲ取持登候得者、空舟運賃として右高江百石ニ付金九両宛於當地急度御渡可被成下候御定、若又私共自儘之働仕候得者、此方と百石ニ付金九両宛為御申訳御屋敷様江可奉差上候、尤枳廻し之儀者、俵取出し目方平均ヲ以此内四俵丈御廻し之通御送り状ニ御書印申受候御定

- 1、斤貫并枳廻し之儀、酒田御渡方之通御當所ニ而御受取可被成下候御

定

但、兵庫入津之砌、早速西出町服後屋八十郎殿江相届ケ置、御贈リ
状并御添書等舩中之者ヲ以御屋鋪様江御届申上、御差図之上川口
江相廻リ荷揚仕候、尤酒田湊ニ而者臺之上請取、若川惡敷瀬取仕
候節者舩手持、其外間屋肩銀・諸雜用舟手持、當所上荷賃并目先
小拂等舩手モ仕候、其外一切舩手無構御約定之事

- 1、濡・沢手・欠乱俵・鼠切等御座候節者、舩手モ弁納可仕候御定
- 1、難風ニ出合荷打等仕御廻米多少ニ不限不足等御座候節者、何連之湊
成共直様入津いたし、相達浦手形持參可仕候、若其儘ニ而罷登候節者、
都而舩手モ皆弁銀可仕候、尤運賃銀ニ而御引取可被成下候、不行届之
節者、元舩并諸道具不殘御引上御勝手ニ御賣拂被下御皆算被成下候共、
其節一言之申分無御座候、万々一難破舟等有之節者、越中境モ上者大
坂御藏屋敷様江御注進、同所モ下者酒田湊江御注進奉申上、御出役之
上御差配ヲ請、御取捌ニ預リ可申候也
- 1、枿御捨之儀者、土用迄四歩、土用過登着仕候節者五歩、若出枿有之
候得者、何程ニ而茂時之相庭ヲ以出枿代銀ニ而舩中江被下候也
- 1、長州下之関・雲州三穗ヶ関江入津之節ハ、上下共御用達御舩宿へ届
ケ可仕御定

右之通此度御屋鋪様御受取之御廻米八百五拾石運賃前文之通慥ニ御請負
奉申上候処実正也、書外都而大坂廻舩可為御法候、為御證為取替御約定
一札依而如件。

安政四年

巳閏五月

豫州浪止濱直乘舩頭

金栄丸

徳五郎 印

淡路屋

孫左衛門印

木津屋

孝 助 印

松前様

御蔵屋敷方

森歛兵衛殿

とあって、金栄丸（直乗船頭徳五郎）、淡路屋孫左衛門、木津屋孝助との間に 850石の大坂廻米を契約している。契約書にある下関の御用達船宿とは、村屋吉左衛門・大黒屋甚五郎（別名松屋吉左衛一藤野家の下関出店近江屋繁蔵の親類）の2名である。⁰³雲州三穂ヶ関の御用達船宿名は不明。金栄丸は、閏5月19日大坂を出帆し、6月5日下関に寄港した上で北上し、6月14日酒田着、同月25日酒田を出て、8月8日大坂に帰着したが、この際同船には上乘役として竹内忠右衛門が乗船している。竹内は上乘役としての一般的任務の外に「酒田積入斤貫廻し之事、塩御領地江相廻し益不益御尋之事、若下し方ニ相成候得者酒田に御領地江送造方御尋之事、御米之外御産物為御登ニ相成候様御咄入承り御帰リ之事、御領地へ下し物品々御尋御帰リ之事、御領苗物土地ニおふじ候品御座候ハ、何成とも被仰下候様御申之事」⁰⁸の5項目の調査を命じられているが、その内容からして、かかる調査を命じたのは、森歛兵衛かと思われる。

ともかく、上乘役竹内忠右衛門は、こうした任務を課せられていたこともあって、6月14日酒田に着くや、いち早く同地に出役中の東根勘定方元締兼公事方中村権平（中之間席）に御目見した上で、翌15日東根へ向け出立、3日後の18日東根陣屋に到着し、ただちに奉行田村重太夫はじめ東根勘定方下役村上恒右衛門（新組御徒士）に面会した。その後6月21日東根を出立、23日酒田にもどったが、竹内の「日記」6月23日条に「同廿三日清川出立、八ッ時酒田着、直様中村権平様江御用状油紙包三通外書記し之通御手渡し申上候、折角東根へ参り候甲斐も無之中村様も不行届心外之至と被仰候、金栄丸も昨日迄ニ御米積立ニ相成候由ニ御座候」とあるところからすると、大坂廻米そのものは予定通り実現したものとみられるが、先の独自の調査項目に対

する東根領出役の役人側の反応は、必ずしも積極的なものではなかったようである。

安政4年の動向については、以上の程度しか判明しないが、^{on}これらの事実を総合すると、蔵屋敷再興時の安政4年にあつては、東根領年貢米の大坂廻米が主体をなしたこと、また、その廻漕は雇船（賃積船）によって行なわれたこと、しかし、一方で森歙兵衛を中心に年貢米の大坂為登のみならず、米以外の諸産物の大坂為登と塩をはじめとする諸物資の藩領（特に松前）への廻漕という、いわば上下荷物の売買の方法が検討されていたこと、などが明らかとなる。特に、蔵屋敷運営の主体となった森歙兵衛にとって最も関心があったのは、年貢米の大坂廻米というまでもなく、上下荷物の廻漕と販売という、いわば買積船（北前船）方式の経営を同時並行的に行なうことであつた。そのため、彼はいち早く手船盛徳丸（船頭は弟の徳三郎）を建造した上で、松前藩側に年貢米及び諸産物の大坂為登方を強く要望していった。その結果、松前藩側も蔵屋敷の運営に関して具体的方針をうち出す必要に迫られてくる。しかし、順次みていくように、江戸藩邸の役人と国表の役人との意見の不一致などもあつて、具体的方針が決らないばかりか、一時決定された方針もその後の複雑な要因がからんで二転三転する有様であつた。

〈安政5年〉

まず、年不祥（但し、本文の内容からして安政5年と思われる）3月11日付の森歙兵衛宛柴田矢太郎の書状に次のように記している。

- 1, 去月朔日付同十二日付兩度之御狀追々相達致拝見候、然者御手船合船被仰付候ニ付而も御蔵屋敷御蔵元一同氣栄宜、且徳三郎儀も御船頭役被仰付、於貴様ニも難有御安心之旨後尤ニ存候、御船皆出来之上者、早速酒田江乗廻し成丈ヶ骨折相勤候様致度、乗廻し宜敷御雇船に過分之御益ニ相成候得者、一兩年之内又ゞ壹艘も合船申立候心得ニ候間、呉ゞも徳三郎出精相勤候様貴様も励為勤候様致度存候

- 1, 御蔵屋敷追ゞ御都合能、就而者近江屋一同大ニ乗込氣請宜ニ付而も、

猶此上一兩輩御立入引入度，同家ニ而も心配致し呉，各方ニも御心掛被居候段致大慶候，一兩年之内ニ能き御立入一兩輩出来候様致度事ニ候

- 1，御國産物一万石日程も為御登之趣，當方と高崎迄申遣し候段御承知之由，右者急度壹万石為御登旨申儀ニも無之候得共，松前表と者未何程与申儀御申越ニ者無之候得共，御地為御登有之候而も，万一當地抔之振合ニ相成候而者以之外之儀ニ付，為御用心御國表と御尋越ニ相成候ニ付，拙者と廉書を以高崎迄及問合候處，廉と差支候筋も無之趣挨拶申越候間，其旨松前表江去月晦日御便ニ而御用状差出候間，猶當方ニ而も其筋江拙者と其段申立置候ニ付，少なくとも三四千石目者为御登相成候儀与存候，當年都合能相成候得者，明年者究而多分之石数为御登可有之，何卒當年之處首尾能参り候様致度，貴様方ニも御骨折之程呉とも祈念罷在候

これによれば、安政5年の初め頃，用人柴田矢太郎は，御手船盛徳丸の建造は，蔵屋敷，蔵元にとって「氣榮宜」しいだけでなく，雇船（運賃船）より「過分之御益」になるとみて積極的に歓迎し，さらに一兩年のうちにもう一艘建造したいと考えていたこと，また蔵屋敷の運営についても楽観的で，一兩年のうちに蔵屋敷出入の商人をさらに一兩人増加したいものと考えていたこと，また，国産物についても，1万石とまではいかなくとも，少なくとも3,000～4,000石の大坂為登は可能と判断し，翌安政6年には同年以上の大坂為登も可能とみていたこと，などを知ることができる。つまり，安政5年の初め頃までは，蔵屋敷再興の中心人物である柴田自身は，蔵屋敷の運営について全体として極めて楽観的な見方をしていたようである。ところが，現実には極めて厳しい状況におかれていた。森歡兵衛がこの柴田の書状を受取った時，彼は松前藩庁からの呼出しで，松前表に下ることになっていたが，その後松前表に向い，直接藩の役人と折衝してみると，藩の具体的方針と柴田の考えとの間には大きなズレが存在していた。この間の事情を知るために，

同年6月、森歡兵衛が藩側に提出した書類の内容を示すと次のとおりである。

乍恐以書附奉申上候

私儀、今般御呼下シニ相成候義者、大坂表御蔵屋鋪御再興ニ付御國產荷物御買入為御登方之御儀与乍恐奉推察候間、右用意金御蔵元江頼合仕為御替請手形貰持参仕、先達而中御用帖ニ相添奉差上候、然ル処聊御含違ニ而、御國產御買入之御手配茂無之候御容子奉窺上當惑仕候ニ付、大坂表之容子委細奉申上候処、御聞届被下置格別之思召ヲ以御買入方御心配被成下置、凡三千石目程為御登ニ相成可申候様被仰下難有仕合奉存候、然ルニ俄ニ御差支之廉出来、御國產之内魚類一切為御登方之儀御見合ニ相成候段奉恐入候、寔ニ以御時節柄与申御太切之場合ニ御座候、當年之処御見合被遊候段至極御尤之御儀ニ奉存候、尤當年之処大坂表之御容子疾与御見定之上、明年¹為御登方ニ相成候様奉願上候、尚亦大坂御蔵屋鋪之儀も當節之人氣ニ而者、世界一統騒々敷時節ニ相成候得者、此所落付人氣穩ニ相成候次第諸家様之御振合も精々相働御都合宜様取斗らへ、追々御融通相附、御產物年増為御登方被為遊候様相成候上者、自然御益筋ニ相成、乍恐御上様之永世御為筋ニ被為成候様仕度心願御座候

右ニ付候而も於御國表大坂懸リ之御役人様御取立無之候而ハ萬事不都合ニ御座候間、大坂表御留主居様江戸表⁵御勤番御勤被遊候ハ、御國表⁶茂御交代御勤被成、大坂表之振合御吞込御懸リ御役勤被成下候様仕度奉存候、尚亦明年⁷御國產為御登相成候節者、御勝手御懸リ御重役様之内御上坂被成下、蔵元應對之上手堅御法立被成下候儀者諸家様之御振合ニ御座候、此上御箱入而三人も相附候様仕度奉存候、兎角御箱入多出来候程御融通之御都合宜御繁昌基ニ御座候、宜御評定被成下度奉願上候

- 1、御新領羽州表御收納米余程石高相納リ候様承知仕候、就而ハ御領分入用米御百性願出之通御拂被為遊候義者無據候得共、他領江御拂米之

儀者蔵敷御停止被成下、成ル丈ヶ石高為御登相成候様奉願上候、當年之様ニ御國許へ御積取ニ相成候而ハ治定ニハ相成不申、御蔵元始メ諸人之氣請ニ相拘り、其上直違旁御損失ニ相成申候、元来大坂表与御當國之米相庭ハ古来も平均大坂之方直段釣り合宜御座候、殊ニ羽州米者米生不宜候間、腹中答不申候故、大坂表ニ而ハ飯米相成申候間、却而上米之釣り合も直段宜相捌申候、尚亦為御登米丈ヶ御國許ニ而御買入被為遊候ハ、沖之口御収納方相増、船手之融通宜自然市中之繁昌之基御座候、大坂表為御登方御情被成下、成ル丈為御登荷高二相成候様奉願上候

- 1、御船盛徳丸廻シ方之儀者、明年一番下り羽州米積取ニ差下シ、貳番ニ者御當國江差下シ御場所江保用ニ差下シ、登リニ者、御産物買入為御登ニ相成候様奉願上候、場所江一上下乗廻り不申候而ハ船中手當も無之難渋仕候、尚亦船代金勘定相立不申候而ハ蔵元江対相済不申候間、明年も御声懸り被成下宜御場所江御廻シ被下置候様奉願上候、猶亦明年も紅花廻シ方之義、越後庄内辺之小船建江七八駄宛運賃積ニいたし、越前敦賀揚ニ仕度、海上も半分ニ候間御安心之方ニ御座候、万が一海上難事御座候而も多分之御損金相立不申用意ニ御座候、此段酒田表蔵元問屋へ篤与御相談被為遊手堅く積送り候様仕度奉存候、紅花捌方京都ニ而相捌申候間、大坂并ニ敦賀も格別駄賃之違無之候間、海上近キ方御安心之上御弁理筋ニ奉存候間、此段奉窺上候

- 1、御窺奉申上候儀者、大坂御蔵屋鋪懸り雇入召抱候者共、昨年之處ニ而ハ初年之事故私最奇之者又者懇意之者共至而安給金ニ而召抱へ候義者、追御繁昌ニ随ひ増金致召使可申様申論置候、夫を樂しミ相働居候得共、當年之様ニ為御登荷無之候而ハ、其儘召使置候茂無益御事ニ奉存候、此義如何取斗可申候哉御差図被仰付被下度奉願上候、乍恐此段以書附奉窺上候 以上

午六月

森 歡兵衛

上

すなわち、森は、藩庁から呼び出された際、てっきり「御國産荷物御買入為登方」の件で呼び出されたと思い、蔵元に掛合い資金を準備した上で松前に向ったものの、松前に着いてみると柴田矢太郎の判断とは大いに異り、「御國産御買入」の手配は何一つされていなかった。そのため、森は藩側に種々説明した上で、この件を強く要望したところ、いったんは「凡三千石目程為御登」の許可が出たものの、その後俄にこの方針が撤回され、国産物の内魚類については「一切為御登方之儀御見合」ということになった。この方針の転換が何によってもたらされたものなのか、この文面からは知り得ないが、国産物（特に蝦夷地産物）の買入と大坂廻漕を強く主張する森自身が、この方針転換を「至極御尤之御儀」としてあっさり受入れているところからすれば、同年3月大坂と兵庫に新設された幕府の箱館産物会所（兵庫は出張所）の件と関係していたものと思われるが、これについては再度後にふれることとしたい。とにかく、こうしたこともあって、国産物の買入と大坂為登については、当面様子をみた上で対応することとし、かわりに、大坂勤番役人の国表よりの派遣（従来は、留守居初め大坂係役人の中心は江戸詰家臣）、御勝手掛り役人の大坂への派遣、御館（蔵屋敷）出入商人¹¹⁸の増加等、大坂蔵屋敷体制の充実強化を強く要求した。

また、羽州東根領の収納米については、安政5年には「御國許」、つまり松前へ廻漕し、大坂への廻米は行なわれなかったことが分る。そのため、森は大坂廻米を強く許え、その理由として、羽州米は大坂では飯米としての需要が多いだけに、かえって高値で売れること、また、「大坂為御登米」分だけ国許で買入れれば、沖之口収入が増加するのみならず、船手の融通も良くなり、「自然市中之繁昌之基」になること、の2点をあげている。もつとも、当時松前藩のおかれた複雑な経済事情を考慮すると、この森の論理が果してどれだけ説得力をもつものであったかは疑問の余地が残るが、これについては、

後に再度検討を加えてみたい。

さらに、こうした事情をふまえつつも、森は、御手船盛徳丸の運用について、翌安政6年には、1番下りは「羽州米積取」を行ない、2番には松前へ差下し、蝦夷地場所へ「保用」(運賃積を条件として含んでいる買積予約)に差下した上で、登りには、蝦夷地産物を買入れて大坂に為登たいとの考えを示し、蝦夷地産物の買入を強く要望しているが、それというのも、蔵屋敷が再興されたとはいえ、当初予定した羽州東根領の年貢米はいうまでもなく、他の諸産物の大坂廻漕も思うにまかせぬ状態にあっては、まさに「場所江一上下乗廻り不申候而ハ船中手當も無之難渋仕候」状況に追いやられていたからにほかならなかった。

このように、森欽兵衛が藩庁に提出した上申書でみる限り、大坂蔵屋敷の運営は、安政5年に至っても未だ不安定な状態におかれ、その後の具体的見通しさえ立てきれずにいるのが実情だったようである。もっとも、同年国産物の大坂為登が全くなかったのかというところでもなく、東根領産の紅花等はそれなりに送られていたことは、安政6年5月25日付の柴田矢太郎宛森欽兵衛書状に、

昨年九月十九日、御船盛徳丸兵庫安着、同所^(ママ)積送り申候、紅華賣捌之儀者、入津之節京都総屋手代幸兵衛下坂仕^(ママ)乍直入為致候處、平均直段駄ニ付金七拾兩位之様被申候得共、慥ニ引合申候場合ニ至り不申、乍併當蔵屋敷詰御留主居始詰合中御船頭并御藏元近江屋半左衛門様大舩賣捌申候而直様一統評儀も被致候由ニ御座候得共、元直段相分り不申、京都総屋久三郎・同番頭次兵衛最上表江紅花為買登ニ罷下り、御船頭盛徳丸入船前致上京、當御領分為御買登之紅華平均六拾八九兩ニも大坂着ニ而相成可申様噂被申越、格別利潤ニも相成不申、京都相場追々引揚ケ候模様ニ相聞へ、今少々足り共御益増ニ仕度見合申候内、追々不景氣下落仕候ニ付一統心配被致候處、其節京都東都兩處共何角騒々敷模様ニ而、市中一統人氣相立不申、夫ニ付紅花杯も下落相成候様承り、何連追々世上

穂ニ相成候得者、直段も立直り可申様一同風説も有之相樂み居申候處、
尚追々不景氣ニ相成り賣捌兼申候、其内江戸御屋敷より元直段も追々相分
り申候處、総屋主従より承り候より壱駄ニ七八両も下直ニ御座候ニ付、入船
之節賣捌不申候義を一統後悔仕候

とあるによっても知ることができる。しかし、この文面が如実に示してい
る如く、紅花の取扱いは、森欲兵衛はじめ松前藩の諸役人にとって初めての
経験であったこと、また、紅花は海産物とちがって、その主要市場が京都で
あり、したがって、その売捌きに当っては、京都の紅花商人に全面的に依拠
しなければならず、そのため蔵屋敷側が相場の変動をみきわめつつ、独自の
判断で売捌くことが困難であったこと、などから、蔵屋敷の経営にとっては、
労は多くても益の少ない商品であったようである。したがって、紅花の廻漕
があったにしても、蔵屋敷の経営全体にとっては、それほど大きな比重を占
めるものではなかったものとみてよい。

〈安政6年〉

こうした状況のまま安政6年を迎えるが、同年正月、森が留守居高崎門弥
に差出した「覚」²⁰⁾は、当時大坂蔵屋敷の置かれた困難な状況をあますところ
なく示しているので、次にその主要な部分を示しておく。

1、御役所詰相勤居候者共、未御長屋無御座候分者、病氣之節薬札者御
上様より被為下置候様奉願上候

1、私江御長屋被為下候節、御上様より被為下候分者、御規定茂被為在候
御儀如何様ニ而も宜御座候得共、借受候家之儀者少々間廣ニ無御座而
者差支申候、此儀者御兼知被為在候通、御蔵元始御館入御出入之者共
折々内談ニ被罷出候義毎度御座候間、餘りせま宅ニ而者不勝手ニも御
座候、猶又銀主方外聞も不宜与乍恐奉存候、此段御伺奉申上候

1、昨年春以来私病氣ニ而引籠居候節、金三拾両近江屋より借用仕候、右
者私病中諸雜費其外松前表江罷下り候手當金ニ借用間渡仕候、此金子
ハ一先返済不仕而者甚以不都合ニ奉存候間、暫之処御立替之儀奉願上候、

尤御上様ニ御入用之節者、近江屋に借用返上納可仕候間、此段奉願上候
1、當年に私御長屋頂戴仕候得ハ、無商買ニ而も難相勤奉存候ニ付、為
試味増少に拵商内自分限仕度奉存候、右仕入方之儀ニ付御大豆御米等
時之相庭を以御拂被成下間渡相成候様奉願上候、尤代金之儀者賣拂次
第御上納可仕候、若又仕入之味増賣残等御座候共、無相違御返済奉申
上候、御送り金之御差支ニ者相成不申候様兼而相心得居申候、此段御
願奉申上候

しかし、安政6年は、前年森が藩庁に東根領の御収納米及び国産荷物の大
坂為登を強く訴えたこともあって、事態は少々好転してくる。すなわち、同
年5月10日付で家老蠣崎将監宛に差出した森の書状に、

1、當年羽州表御廻米御石数三千石斗、外に大小豆取合三百石斗御積為
登、右艀に此程迄無難皆着に相成上下一同大悦之御儀奉存候、殊更
當年者御米俵并実入等入念有之、捌方都合宜米相庭當時直段百六七匁
位に而最早半分斗御拂に取斗申候、此模様ニ御座候ハ、御米者相應
之御利潤に可相成与相考申候

1、當年江差表大漁御座候趣近に風聞承及候、弥以漁事沢山に有之候者
に、多少共大坂為登に相成候様御賢慮御配意被成下候ハ、一同大悦
仕候、若又左様之御事ニ御評儀相定候得者、町人名前ニ而大坂御蔵屋
敷届之送状御取斗御差廻被成下候ハ、當地ニ而如何様共取斗方都合
宜御座候、是又當時柄之处御含可被遊候、猶又先月廿六日御手艀盛徳
丸當湊出帆、羽州酒田表江罷下り申候、尤同處御都合寄直様御地江差
廻候様之御取斗振に御座候間、着岸之節者艀頭徳三郎御伺に可被罷上
与奉存候間、萬に御添慮宜御差図被為仰付候様奉願上候

とあるように、東根領年貢米 3,000石及び大小豆 300石の大坂為登は実現
した。この廻漕状況は表3のとおりで、4艘(内3艘は雇船)の船で廻漕して
いるが、御手船盛徳丸の積荷量が全体の約38%を占めているので、その主力
は、盛徳丸であったことが分る。また、江差表が大漁(多分鯨であろう)と

の情報から、その内少しでも大坂為登にしてもらいたい旨依頼しているが、これが果して実現したのかどうかは不明である。ただし、後述の蠣崎将監宛書状からすれば、一定量の海産物の買取は実現したようである。なお、この東根領年貢米の大坂廻米が、蔵屋敷の経営全体にとってどれだけの比重を占めるものであったのか、正確にはつかめないが、上記の書状で「此模様ニ御座候ハ、御米者相應之御利潤ニ可相成」と記しながらも、同年7月9日付の関東屋新左衛門宛の書状では、「當時御蔵屋敷迎も羽州御米三四千石斗ニ而者格別之御益も無御座⁽²⁾」といっているところからすれば、東根領年貢米の廻米だけでは、その経営が困難であったとみられる。森歡兵衛が当初から国産物、特に蝦夷地産物の大坂廻漕を重視した一因もこの辺に潜んでいたのかもしれない。

表3 安政6年、大坂廻米船別内訳

入津月日	船 名	俵 数	石 数	俵 平 均
4. 1 3	盛 徳 丸	3,000俵	1,182.625 石	3.955 ⁺ 3.8 ⁺
4. 1 7	小 松 丸	2,200	848.400	3.9,3.78
4. 2 8	栄 寿 丸	2,250	872.475	3.915
5. 4	永 吉 丸	550	216.490	3.94,3.933
合 計		8,000	3,119.990	
	内 用 捨		102.204575	
	正 石		3,017.784525	

森家文書「未年御廻米覚」（「大宝恵」）による。

〈万延元年〉

翌安政7年（万延元年）に入ると事情はさらに複雑に展開した。まず、東根領年貢米の廻米については、同年正月9日付で森歡兵衛に宛てた酒田詰佐々木小六の書状に、「當申年为御登米三千石之内、半方為御登之積り、其餘ハ御在所表へ御廻米取斗候趣御達相成候、右者地元米價高直、貴地者下直故之御取斗之由ニ承知致し候」とあるように、予定為登米 3,000石の内大坂廻

米は 1,500石、残りの 1,500石は松前表廻米との方針がうち出された。つまり、大坂廻米は前年の半分に減少させられたわけであるが、その理由は、松前表での米価高値、大坂表の米価安値という両地における米相場の相違にあった。年貢米の大坂廻米の目的がその販売にある以上、主要米穀市場での米相場の変動に伴ない廻米量にも変化を来してくることは当然の理といわなければならないが、後述のように、松前藩の場合、必要米の総てを東根領の年貢米のみに依存できない事情にあっただけに、その裏にはさらに複雑な要因が潜んでいた。

一方年貢米以外の国産物の廻漕については、前年より少々好転したようである。すなわち、同年 2 月 25 日付の蠣崎将監宛書状には、

- 1、當年者御船盛徳丸乗廻之儀、御在所表江差向候様江戸表より先達而被仰達候ニ付、則申渡候所、御船頭始一統大慶仕候、將又蝦夷地御場所御頼合萬々御厚配被為在候段奉恐入候、且又昨年於御地奉拝借候中荷金八百兩也、此度於當地御船頭江相渡申候間、其御地着岸之上御上納可仕与奉存候
- 1、當年御場所敷金登り中荷金とも相渡不申候間、御地ニ而御拝借奉願上候義ニ御座候、定而御懸り御役人衆中江願出可申上候間、乍恐宜御取斗被為成下度奉願上候
- 1、當年者御國産四五千石目御買為登ニ相成候様江戸表より御内達茂有之、御藏元氣請茂よろしく一統大悦仕候、尤此代金与申候而者別段ニ出金者無御座候得共、昨年御乗出ニ付金三千兩差出申候分御産物代金江相廻申候、前金式千兩都合金五千兩二月三月閏月迄ニ追々振出し相成申候、此金者定而御在所并東根御兩地江御差向ニ相成申候様奉推察候、依之右御買為登之儀被仰達候ニ付而者、御藏元并御用達杯より當年茂私儀御用弁与して御國表江罷下り候様仕度段、江戸御屋鋪柴田御氏迄御願立之文通被差出候様子承り候ニ付、此儀者私より差留置申候、是与申者、御旦那様始御掛り様方折角御厚配被為遊候由承り、且御差図茂無

之候処江右之願申上候義者、何歟と私におして申出候事之様ニ相當り、自然御含違ニ相成候而者却而恐入奉存候儀ニ付押而差留申候、乍併右魚類御産物御為登方之処者、偏ニ宜御下知被為仰付被下候様奉希上候とあって、江戸藩邸より盛徳丸を「御在所表」（松前）へ差向けるよう指示があったこと、また、蝦夷地場所産物積取の手配もされていること、さらに、「御國産四五千石目御買為登」の「御内達」があったこと、などを知ることができる。もっとも、その結果はどうなったものか現在のところ正確に把握することは困難であるが、伊達家文書「諸用留」（安政三辰年十月）⁸³の万延元年4月26日条に「御船盛徳丸徳三郎濱マシケ行出帆」とあるところからして、「御厚配」のあった「蝦夷地御場所」は、浜マシケ場所であったことが分る。また、同年には、日吉丸、子歳丸、歓喜丸、恵吉丸（住屋清七手船）、儀徳丸、松吉丸、斉丸、安清丸（蓬来屋忠兵衛船）の計8艘が松前より「分荷為御登」⁸⁴を行なっているので、完全とまではいかなくとも、ある程度のところまではほぼ実現したものとみられる。しかし、後段の文面からも窺える如く、こうした方針でさえ、家老はじめ掛り役人の特別な「御厚配」で漸く実現したものにすぎなかった点は注目されてよい、つまり、この段階に至っても、藩側は大坂蔵屋敷の運営に関して何ら積極的具体的方針をうち出せないままでいたわけである。

〈文久元年〉

こうしたこともあって、森歓兵衛は、文久元年2月大坂を発ち、江戸藩邸にたち寄った上で松前に向い、⁸⁵4月11日に城下に着き、以後11月まで松前に滞在して家老はじめ藩の掛り役人と精力的な交渉を行なった。⁸⁶森家文書にこの間の日記及び大坂蔵屋敷との往復文書（又は控）が残っているので、ここでは、こうした関係文書を手がかりに、同期の状況を整理することとした。

①「日記帳」（万延元年九月吉日）

（文久元年）

四月十一日松前御城下着仕候而十二日御届ケ申上、村上屋三蔵ニ艀上り

致、十五日迄松前勘解由様江度^(家老)参上仕候得共、御養御婚禮万端御取込、
 猶又其節ハ将監様御病中ニ而御引込^(下田図書、家老)、凶書様御引込ニ而、御用向御下リ
 懸ケニ而繁用ニ附^(敷)、御蔵屋之御沙汰無御座、就夫石黒様江参リ咄合仕候
 得共、模様宜からず、色^(理解)利加以申上候処、大吞込少^{(勘定吟味役) (郎)}御腹ニも入申候
 様存候処、御退役ニ相成、夫^(由)田崎貞治様御使ニ而御宅江罷出候処、御
 番ニ而内御役所江参御咄申上候、柴田様^(物頭)御状も参り候間、御執成も被
 下様子ニ御座候得共、何分万事御吞被成候ニ者兩度位ニ而ハ六ヶ鋪、其
 内勘解様^(由)内御尋も可有之哉、御表向御尋御座候哉与相待申候得共、御
 沙汰無之、十九日柴田舎人様御屋鋪引越御世話ニ相成、度^(物頭)濱御屋鋪江
 御尋申上候得共、御取込ニ而志み〱御咄も相成兼、其内田崎様^(所)又^(御用達、勘定奉行)
 御尋御座候間、内御役ニ而荒増申上候得共、何分難御聞取候間、口上書
 ニ而差出可申様ニ被仰、口上書ニ而存意申上、伊達様江差出申候、夫ニ
 附大坂御買入方之義ハ上田曾右衛殿江申附

四月廿七日、江行書状御飛脚便り差出申候、其後瀬尾庄三様御便り、江
 戸行大坂行猶又酒佐^(田)木小六殿行書状御頼申上候、得三郎^(戸)夫小六殿行も
 御頼申上候、其節瀬尾様江口上書御目ニ懸申候、写認メニ相成不申跡便
 リニ残シ申候

五月十三日、蠣将監様へ御見舞申上候処、大坂御買為登之一条御尋ニ附、
 夫^(由)申上、口上書写ヲ御目ニ懸申候処、是ニ而筋ハ能相訳り申候、先年
 御米三千石者御為登ニ取究り候事、何レニ致候而も、其代り為御登不被
 成候而ハ不宜、夫ニ附而貴様勘解由殿同所江御名代ニ而御廻リ被成、御
 供ニ而参り篤与様子見定、買為御登都合ニ相成候様心痛可致与之御事ニ
 而、御同人様ニハ御咄も能御訳り、万事被仰方恐入候、明日濱屋鋪江参
 リ御咄可申様ニ与被仰

翌日濱屋鋪様江罷出御覧申上候処、御目通仕候間、當着以来御上向御用
 繁旁以、貴様ニも長^(由)合不申、定而貴様ハ心配被致候、右書附之処ハ一
 ヽ尤ニ存ル、中ニほまち荷買入候義ハ至極宜様ニ被存候、江戸表ニ而拙

者も柴田カ万事聞込参り候得共、江戸表之咄通ニも又ハ参り兼、請負人
 荷物杯ハ伊達被申候ニ者決而相成不申候、其分ハ請負人中大坂為登ハ同
 所問屋夫ハ世話ニ相成、借用ニも相成居申候故、不実ニ相當申候、此義
 ハ大キニ迷惑ニ相成申候間、是も談事ニ相成不申、万端思通咄六ヶ鋪候、
 是ハ柴田當地一應下り候而談事不申候而六ヶ鋪与被仰候得共、此義ハ左
 様之義ニハ無御座、大坂問屋ニ而金子借用致候請負人壹人も無之、請負
 人カ問屋へ借シニ相成候斗、御屋鋪上ハ相成候得者、鬆頭も心痛無之仕
 合位之事ニ候得共、伊達カ申上候義ハ一円心得不申候得共、夫ヲ彼是申
 候而ハざん言ニ相成申候、一言も不申上差扣申候、左様義斗誠ニ困入申
 候事ニ御座候、夫カ被仰候ニ者、江差買方其外大豆杯之處手配見積旁、
 此度拙者出浮中（遊カ）一兩日前方罷出見積り置、宜時分買方差立可申様致候而
 ハ如何与被仰候、其御儀者私カ御願申上度奉存候、御領地在ハ相廻り少
 たり共大坂引合品有之候得者、見積り引合置御買入ニ相成可申様御申
 立仕度段申上候処、其存意成レ者御懸伊達之方へ可申与之御沙汰ニ附、
 翌朝十五日伊達様内宅江罷出申上候得共、何事私ニ者訊り兼申候、上田
 曾右衛門店手代之方江聞合可申与之儀ニ御座候間、其儘差置候処、十七日
 七ッ時上田カ使参り罷出候処、右之尋ニ附此方ハ存申候処、一先出役致
 万事聞唯見届ケ被成帰（礼）り候得者、大キニ宜鋪御座候、其段伊達様込申上
 置候間、明日御引後御宅江御出可被下様被申候ニ付、委細承知之旨置候、
 然ル処十八日朝四ッ時、御産物御會所カ御用之段申越候ニ附罷出申候処、
 伊達様色ハ御咄御座候得共、金子江戸ニ而差留御下シ金無之困申候義被
 申、猶又産物元ばやりニ而引合ニ相成不申、雇鬆不安心之義被申候間、
 少シ茂追附候咄無御（座カ）なく、小田原之評定ニ御座候、夫カ分荷之義百石ニ
 五十両宛備附ニ而御為御登之外無御座候様被申候得共、是ハ誠無據之致
 方、此致方ニ御法御立被成候得者、又外ニ致方多御座候、先江差江参り
 買不買之處ハ二段ニ致在ハ諸産物何品ニ而も多少ニ不拘見込有之候品見
 届ケ帰リ御趣法申上度奉存候与申候処、其儀ニ決着仕候、定メ而御用席

江中上候与奉存候（以下略）（傍注引用者）

② 6月24日付柴田舍人・森歛兵衛宛大坂蔵屋敷詰合中の書状。

1，御國産為御登方之儀，色々御評議被為在候得共，初年之儀殊ニ其御地元ばやり之趣ニ而，未御取極之場ニ相成兼候由，尤年々定式御益品者多少共御産物ニ被成度御様子御尤至極奉存候，右ニ付松勘解由様御目代御領地御順廻被為成候ニ付，右御附添与して平尾仁左衛門・森歛兵衛御両所御出役被成，江差表并在中御廻被成候旨御苦勞之御儀奉遠察候，猶又當年御産物為御登方之儀者未御決着無御座候得共，蝦夷地産物之所者，可相成丈ヶ万々御厚配骨折為御登被成度御含ニ而各々様御心配被成候由恐入奉存候

1，海蘿之儀，多少共御買入ニ被成為御登ニ相成候旨，依之當地并京都兩地捌方等之儀，委細ニ取調書附差廻候様被仰越承知仕候，當地捌方之儀者，天満橋北詰尼崎又右衛門請負座ニ相成申候，同人出店西横堀瀬戸物町ニも有之，手代久三郎与申者引受取斗候義ニ御座候²⁹，尤右海蘿之儀何程為御登被成候共，當方御蔵屋敷揚ニ而取斗候儀不苦，右座方之儀者，賣拂之節立會ニ相成，買入より壹歩口錢座方江取納候義ニ而，御蔵屋敷江者不相拘候，乍併右者松前産物ニ付矢張箱館會所江御定例之通口錢相納候振合ニ相成候，左候得者，分荷等御拂同様之姿ニ而何之差支も無御座候，則當地直段并諸掛り取調書壹通差廻申候，御落手可被下候，尤ふのり者，多分當地ニ而取捌候故，京都ニ而者當所仲買り買取候模様，然ルニ京都之儀者，代銀請取方等之儀も不弁理故，當地御拂之方都合宜相見へ申候，尤京都大坂屋幸八方江も取調書差出候様申付置候得共，當便問ニ合不申候て者天神丸便ニ差下し申候，左様御承知可被下候

1，御在所表御産物之儀，元はやり之儀，且又初而之儀ニ付，御評議茂区々ニ而御役方様方色々御厚配之段奉恐入候，併當地相庭之儀も近年存外之直段ニ付，たとひ元方少々引上候共，捌方ニおゐて者其割合ニ

上直ニ相拂候故，可相成者宜御賢慮為御登方之處相調候様奉祈念候，尤當御藏屋敷之儀者，御産物為御登高ニ寄御益多少共有之，且當地御口錢之儀者，銀高ニ應し御益出来候儀ニ御座候間，何程ニ而も数品為御登ニ相成候御義ニ御座候得者，急度御仕法も相立，追々御繁榮ニ相成候得者當地積金も出来可仕，左候得者，弥以御上様御為筋ニ御座候間，乍恐御賢慮宜御取斗可被下候

- 1，當地相庭之儀別紙之通ニ御座候，尤此節荷物さっぱり無御座候間，先呼直段与申様之義ニ御座候，盛徳丸御乗廻し御都合よくマシケ下リニ相成候趣，同所者相應之漁事も御座候由，御都合宜御積取自然御模様ニ寄ニ番御下り無之候ハ、，直様早々為御登被成候得者，相應之御利潤も可有之与奉察候，當地之氣配兼而御承知ニ者可有之候得共，一兩年者船着早き方都而宜御座候（以下略）

③. 7月3日付森歛兵衛宛大坂詰井上常五郎書状

然者去々月十七日附廿一日附書状去月十九日廿日与両度ニ相達委細致承知候，然ル処當年御國産為御登方之儀者，未タ御評議中ニ而決定不致候得共，御手配被成候趣ニ付，追々御都合能相整候儀与存候，右ニ付在々御産物御買入之内布海苔之儀も御為登相成候旨ニ而，右諸懸る當地賣捌方取調書忝通差廻候様委細當地下代方迄御申越，則其筋江為聞合候處，布海苔之儀者，當地天満橋北詰尼崎又右衛門請負座ニ相成，同人出店西横堀瀬戸物町ニも同人手代致出張取捌来候，尤當方御藏捌ニ相成候而茂聊差支無之，賣捌之節請方立會忝分口錢者買入方相納候振合ニ有之，乍併松前御産物之儀ニ付，矢張箱館會所江者定例之通荷主方口錢差出候事ニ候（以下略）

④. 12月22日付大坂藏屋敷詰合衆（5名）宛森歛兵衛書状

當方下拙義，松前御城下十一月廿六日出帆，津輕青盛江廿八日着船，明廿九日同所出立，道中恙なく廿壹日江戸表着仕候，此段御安意可被下候

- 1，松前表評定之義も諸役人衆中落合悪鋪未タ取究ニ相成不申候，就夫

柴矢太郎様跡ニ御残被成候、何分御趣法立至而六ヶ鋪、何レ御場所御返済ニ相成候迄取續候様仕度私と愚存申上候而帰國致候
御家老様方并柴田様ニ者何分御都合能被成度御答ニ候得共、外方（邪魔）五尺と入申候ニ困入申候、乍併何レニ致候而も近江屋様へ御迷惑之懸り不申様仕度大キニ心痛致申候、何卒宜鋪都合ニ御相談申上、夷蝦（蝦夷）地御返シ迄面目法相立、近江屋様之出金御手取相成、同家へ十分認用附候様之趣法立之義ヲ申上置、極意者柴田矢太郎様ニも其答ニ御座候（以下略）（傍注引用者）

すなわち、史料①によれば、森欽兵衛は、城下松前に着くや、早速家老蠣崎将監、松前勘解由（蠣崎将監実子・松前内蔵養子）はじめ、勘定奉行石黒太右衛門、同伊達林右衛門（御用達商人〈場所請負人〉、御勝手向御経済掛、産物会所掛、大坂蔵屋敷取締向掛）、勘定吟味役田崎貞治郎（産物会所掛、大坂蔵屋敷取締向掛）、町年寄上田曾右衛門（産物会所掛）等の関係役人に面談し、国産物の大坂為登を強く訴えたものの、森に「小田原之評定ニ御座候」と思わせる程、各掛役人の考え方はまちまちで、したがって、交渉の経過もあまり捗々しくなく、少なくとも5月の段階では、家老松前勘解由の領内巡視（例）に同行し、西在の産物の調査を行なうことを許可されたにすぎなかったようである。ただし、②に「盛徳丸御乗廻し御都合よく、マシケ下リニ相成候趣」とあるので、マシケ場所での盛徳丸の産物積取だけはどうか許可されたものとみられる。

ところで、②に「御國産為御為方之義、色々御評議被為在候得共、初年之儀」「御在所表御産物之儀元はやり之儀、且又初而之義」とあるが、この「初年之儀」「初而之儀」といわれる「御國産為御登」とは、具体的に何を指しているのだろうか。これまでみてきたところからすれば、国産物の大坂為登量は少なかったものとみられるものの、決して皆無だったわけではない。それなのに、ここでは「初年之儀」「初而之儀」と表現されている。したがって、こうした経緯からすれば②でいう国産物とは、従来とはちがった意味

で使われているものとみななければなるまい。とすると、従来とは異った概念の国産物とは一体何なのか。現在のところ、史料不足も手伝って確かなことは分らないが、伊達家文書「諸用留」（安政三年）に、

御勘定奉行

御會所掛

- 1, 大坂御蔵屋敷江御廻米代りとして為御登可相成西地出産鯡類, 御城下ニおゐて御買入方御手配之外江差表ニても御買入可相成と之御内評ニ付, 此度同所着之上其段酒井蔀江相達, 毎春西地江出稼之者共, 揚荷物小廻船を以積取高多分之年柄ニ者囲荷等ニ相成候事故, 直段も下落致候由ニ付, 右様之節者, 御都合次第式千石目内外之産物御買入可被成御見込ニ有之, 右者問屋共始船手取扱之者共差支之筋有之間敷候得共, 御手初之事故, 為念一應相尋申立候様蔀江達置候處, 其後同人罷出, 前段之通産物類出高多分之年柄ニ者, 三千石位迄御買上被仰付候而も聊差支無御座旨一同御請申出候段蔀申立有之
- 1, 前段之通産物御買入方差支無之趣ニ付, 右御買入取扱之儀, 同所問屋村上屋三郎右衛門儀身柄相應且実躰之趣ニ付, 同人儀被仰付候間申渡候様蔀江御達候處, 其後同人罷出申渡済御請申出候段申立有之候, 則三郎右衛門申渡口達書左之通

村上屋

三郎右衛門

右者大坂御蔵屋敷江為御登可相成鯡類其外産物御買入ニ付, 取扱被仰付候間, 其段可被申渡候

但, 表方者三郎右衛門取扱掛被仰付候得共, 先年町年寄相勤, 其後病身ニて退勤致, 當時隠居罷在候同人父弥右衛門儀, 産物買入等切者之趣ニ付, 内実弥右衛門差引致し精々御益筋相成候様取扱可申旨及内達候儀ニ御座候事

右之通於江差表被仰付候間, 此段相達申候

（文久元年）
西六月廿二日

とあるところからみて、おそらく東根領年貢米の大坂廻米の代りとして、城下（後江差も含む）で買入れる「西地出産鯰類」のことと思われる。また、同年5月10日、上田曾右衛門が「大坂蔵屋敷江為御積登産物御買入掛^別」を命じられており、かつ、①に蠣崎将監の言として「先年御米三千石者御為登ニ取究り候事、何レニ致候而も、其代り為御登不被成候而ハ不宜」とあることからして、5月までには、こうした方針がうち出されていたものとみられる。なお、江差の場合、その対象は、主に「西地江出稼之者共」の漁獲物になっているようであるが、これは、城下松前が主として西蝦夷地場所産物（場所請負人の生産物）の集荷地となっていたのに対し、江差は、西在及び西蝦夷地への追鯰・二八取等の出稼小零細漁民の生産物の集荷地になっていたことによるものであろう。

しかし、こうした方法も、「元ばやり」、つまり、松前相場の方が高値という状況下にあっては、その実施が困難であったことは、④に「松前表評定之義も諸役人衆中落合悪舗、未タ取極ニ相成不申候……何分御趣法立至而六ヶ舗」とあるによっても知ることができる。森が、あえて布海苔の買付を行なおうとしたのも、他の主要海産物の買為登が困難であったからにほかならない。

以上の諸点からすれば、蔵屋敷運営の為の策は色々講じられたものの、結果としては、文久元年に至っても、何ら実効的方法をみいだせない状況に置かれていたことはまちがいない。

〈文久2年〉

文久2年の大坂蔵屋敷に関する記録・文書類は非常に少ないが、文面からして、文久2年のものと思われる森歙兵衛宛柴田矢太郎の書状を示すと次のとおりである。

一筆致啓上候、薄^書曙之砌弥御無異珍重存候、随而拙者儀松前表勤番済道中無滞去月十六日致帰府候、乍慮外御休意可被下候、然者貴様松前表御

在留中茂薄：御承知之通，其御藏屋敷江為御登物之儀ニ付，品々理を尽し申立数日御評議有之候得共，何分ニ茂不相整，其後既ニ為御登物而已ならず御藏屋敷御廢被仰出，此度右取扱として田中半藏上坂被仰付，御同前嘆息之至残念申斗無御座候，尤今般御弃廢ニ相成候義者，松前表品々差支候儀有之，且當時之様子ニ而ハ，五千石六千石目など、申産物為御登之御手配者迄茂出来不申，是迄迄茂盛徳丸壺艘マシケ江差下候ニ茂漸々之事ニ而出来候程之義ニ有之候得者，数艘買積等者猶更之事ニ而，第一御手操不宜候得者，松前表ニ而御買入之御都合ニ茂不相成，其表御借入金を以買入候得者，利分等茂相掛り，又千石也千五百石目為御登被成候而茂御益薄ニ而，御藏屋敷年分之御入用丈ニ茂不行届，其上難申述御差支も有之，彼是以無御據御廢被成候間，不惡御承知可被成候，乍併昨年之御損分御厭ニ而御藏屋敷迄御取潰被成候儀ニハ決而無之，定而御藏元始其表ニ而者色々評判も可致候得共，聊之損分ニ而御廢被成候訳ニ者無之，何分ニも品々御差支有之，無余儀御取潰被成候，是迄御藏元も度々廉立候御用途金も差出，其上追々御借入増ニも相成候處，前文之次第ニ成行，御藏元江対し何共面目も無之，御返済金之儀も此度皆済とも相成候得者立派ニ候得共，一時ニ御行届無之，兼而薄々御内談申置候通，當金五千兩迄之積ニ有之候得とも，御藏所御廢ニ相成候ニ付而者，先方ニ而何と申候も難斗，可成丈當金五千兩迄ニ而相济候様致し度，飯田江も宜御内談致度候，興廢時も有之事と者乍申，斯迄ニ者相成間敷存候處，以之外ニ成行，是迄貴様も度々松前江御下り御骨折之甲斐茂無之泡と相成，拙者も五ヶ年来心配致し候詮茂無之，呉々も嘆息之到残念申斗無御座候，乍去所詮唯今之姿ニ而者，よしや為御登物出来候共，治定いたし候事ニ者無之，三年とハ續申間敷，責而西地斗ニ而も元々之通不相成候而者心配而已いたし，更ニ其甲斐も無之，又東根米之儀も御違約ニ相成，為御登無之も御藩中為筋ニ相成候義故，氣請ニ相拘り，為御登米之儀強而申立候事も不相成，彼是廢時之至り候と觀念致し候より手段も無

之、志かし万一好キ時節も至り候ハ、其勢ひニ而如何様共又ハ可相成、
迎も當時之姿ニ而者、勞して功なき事ニ御座候、御蔵元始飯田其外へも
実ニ面目無之儀ニ御座候、委細之義者直之丞方迄申遣候間、宜御承知可
被成候、飯田江も書状可差出之處、何分認方も無之不申遣候間、宜御申
達可被下候、右御蔵屋敷御廃之儀、表向其表ニ而相達候迄者御洩し無之
様致度存候、先者右之段可申述如斯御座候、恐々読言

四月十七日

柴田矢太郎

森欽兵衛様

すなわち、この書状が文久2年のものとすれば、松前藩は、同年春、遂に
大坂蔵屋敷の廃止を決定したことになる。その理由は、第1に、「松前表品
ハ差支」とある如く、大坂蔵屋敷宛に廻漕しうる国産物の絶対量が少ないこ
と（5,000石～6,000石の産物為登は全く不可能、盛徳丸のマシケ場所下しも
漸々の事、たとえ1,000石～1,500石の為登が実現しえたとしても、資金不足
のため借入金に依拠して行なうのでは、利益が無い）、第2に、東根領年貢
米は、「為御登無之も御藩中為筋」になること、つまり、大坂に廻米するよ
りは松前に廻米した方が有利であること、の2点であった。こうして、文久
2年春、大坂蔵屋敷は遂に廃止され、同年8月までには、「一同江戸并在所
江引取」、森欽兵衛も8月6日大坂を出帆し、同月9日国元へ帰った。

以上、安政4年再興の松前藩大坂蔵屋敷の運営状況について、主に森家文
書を手がかりにその概要をながめてきた。現存の森家文書には、蔵屋敷の経
営そのものに関わる経営文書は殆んどなく、その大部分が森欽兵衛を中心に
した日記・覚・書状類という、いわば蔵屋敷の周辺に関わる文書であるため、
経営の実態を計数的に把握することは不可能であるが、以上の検討から、少
なくとも次の諸点は明らかにできたと思う。すなわち、安政4年、東根領年
貢米と国産物の大坂廻漕を目的として大坂蔵屋敷が再興されたものの、この
2つの目的のうち、東根領年貢米については、廻米予定量 3,000石のうち、

現実に 100%大坂廻米を実現しえたのは安政 6 年のみであり、他の年は、予定石数の半石又はその一部に終わったのみならず、その総てを松前に廻米し、大坂廻米の全くみられない年（安政 5，文久元年）さえあったこと、そして、こうした結果をもたらした背景に、大坂廻米を行なうよりは松前廻米を行なった方がより有利という藩側の複雑な事情が存在していたこと、また、国産物（その主体は海産物にあったと思われる）についても、主要産地たる蝦夷地が幕領又は東北 6 藩の分領地（安政 6 年以降）という状況下にあっては、現実問題として、当初予定しただけの大坂廻漕は殆んど実現しえなかったこと、などの理由から、結局は文久 2 年、再興後わずか 4 年目にして廃止という運命をたどらざるをえなかったことである。

しかし、これは、あくまでも主に大坂蔵屋敷の現地担当者たる森歆兵衛に関わる文書を介して知りえた一般的概況であって、それ以上のものではない。そこで、次に以上の諸点を確認した上で、この期の松前藩の財政経済政策の特質、特に米穀の流入状況と領主蔵米・東根領年貢米との関係、及び蝦夷地産物の流通事情と国産物をめぐる藩の経済政策との関わりについて若干の検討を加え、その上で大坂蔵屋敷をめぐる問題点を整理することとしたい。

3. 蔵屋敷をめぐる諸問題

a, 安政期の松前藩の財政経済政策の特質

安政 4 年の大坂蔵屋敷の再興が、安政 2 年の蝦夷地全域及び木古内以東・乙部以北の和人地の幕領化による藩領域の極端な縮小と奥羽両国における分散的飛地の領有、及びそれに伴う財政構造の著しい変化という政治経済的条件の変動を背景として行なわれたことは先にみたとおりである。こうした変化が、藩首脳部に新たな財政経済政策立案の必要性を提起したことはいうまでもない。大坂蔵屋敷の再興も、いわば、こうした一連の新たな経済政策の一つとしてうちだされたものであるが、これとの関連でまず留意しておき

たいことは、この期にとられた財政経済政策のあり方と藩が独自に設置した産物会所との関わりである。

まず、前者についてみると、安政4年11月14日「勘定奉行限」に出された「口達之覚」⁸⁹に次のようにある。

近年莫太之御物入ニ而相重り候折柄、去卯年東西蝦夷地島々共一圓御上知被蒙仰、奥羽ニ而右御替地被仰出、猶年々壹万八千兩宛御頂戴被成候得共、以前之御収納ニ引競候得者、既ニ七千兩程之御減高ニ相成候ニ付、昨年十二月中御歎願書御差出被成候得共、今以御沙汰も無之、此姿ニてハ後年必至と御差支ニ相成、御警衛を始大勢之御家中御扶助百姓共御撫育旁も御行届ニ成間敷、殿様ニも深く御配慮被遊、於拙者共恐入致心痛候、依之今般御勝手向御仕法替被仰付候、右ニ付御評儀之上伊達林右衛門殿御勘定奉行格ニて御勝手向御経済掛り被仰付候間、厚申談都て御仕法立いたし相伺可被申候、尤此度之儀者、殿様御始拙者共々も御省略之廉々差図不致、万事各方江御伺ニ成候間、不寄何事無遠慮申談、御趣意相貫追年御安堵相成候様可被申談旨御沙汰ニ候

その後、同年12月27日勘定奉行石黒太右衛門、同格伊達林右衛門連名で「諸士・徒士・下代・足輕共ニ至込身分之輕重ニ不拘、御為筋者勿論、御取締向御國益ニ相成候儀存付候族者、無覆臈封書ニ認支配頭迄差出候様被仰付候ハ、数多御家中御扶持人之事故、中ニ者良法之經濟申立候族も可有御座哉ニ奉存候」との判断から夫々へ御触達してくれるよう御用の間へ上申書を提出、その結果、12月29日付で次のような達⁹⁰が出された。

近年御物入ニて打續候折柄、去卯年東西蝦夷地島々共御上知被蒙仰、於奥羽御替地并年々御手當金御頂戴ニ成候得共、以前之御収納ニ引競候得者莫太之御減高ニ相成、此御姿ニてハ御警衛を始大勢之御家中御扶持人御扶助百姓共御撫育等も往々御行届ニ成間敷深く御配慮被遊候ニ付、今般御勝手向御仕法替被仰出御経済掛り等被仰付候、依之御為筋者勿論、御取締向御國益等之儀存付申立度者ハ、兼而達置候通、假令忌諱ニ觸候

儀ニても不苦候間、聊無斟酌以封書支配頭迄可申達候

すなわち、上記史料によれば、安政2年「東西蝦夷地島々共一圓」上知以降、それ以前に比し約7千両の減収になり、藩財政は著しく逼迫したこと、そのため、安政4年11月、御勝手向の「御仕法替」を行ない、「御勝手向御経済掛」を設け、御用達商人（場所請負人）伊達林右衛門を勘定奉行格に抜擢した上で同掛に任じたこと、また、財政再建策を立案するに当って、藩主・家老等の最高責任者が直接的な指揮権を発動せずに、藩内から広く意見を求めつつも、事実上、勘定奉行及び御勝手向経済掛にその実権を与えたこと、などの諸点が明らかとなる。このことは重要な問題を含んでいる。というのも、こうした体制下にあるのは、勘定奉行及び御勝手向経済掛就任者の性格が、その時の財政経済政策のあり方によりストレートに反映される可能性を内包することになるからである。

ちなみに、現在判明する限りにおいて、かかる役職への就任者をみると、安政4年末の勘定奉行は水牧喜左衛門、石塚官蔵、西川朔太郎、目谷歆兵衛、小林恰、石黒太右衛門、同格伊達林右衛門、勘定吟味役は森田才八、田村量吉、平田男也、田崎貞次郎、中村権平、伊藤紀之十郎、板垣猶人であったが、翌安政5年正月、勘定吟味役田崎貞次郎、平田男也が各々「御勝手向御経済掛」に、城下の株仲間問屋上田（近江屋）忠右衛門が「御勝手向御経済掛手付」に任ぜられ、また、同年5月には、伊達林右衛門は産物会所兼勤、次いで6月には奉行格から勘定奉行に昇格した上で、7月2日に目谷歆兵衛とともに「大坂御蔵屋敷取締向掛」を命ぜられ、勘定吟味役田崎貞次郎も同年6月勘定奉行に昇格した上で経済方掛に任ぜられ、さらに7月2日には、産物会所掛兼大坂蔵屋敷取締向掛を命ぜられた。なお、目谷歆兵衛は、同年5月、産物会所掛兼務を命ぜられ、城下の町年寄上田曾右衛門（商人）も産物会所掛手付に任ぜられている。⁹⁹

以上の点をふまえると、安政4年以降、松前藩の財政経済政策推進の中心的役割を果たしたのが勘定奉行と御勝手向経済掛で、大坂蔵屋敷や産物会所も

機構上は、勘定奉行の支配下に置かれていたものとみてよい。したがって、大坂蔵屋敷の運営も、国許の産物会所の運営といわばセットして行なわれたものとみられる。また、その運営は、機構上は一応勘定奉行の支配下に置かれていたとはいえ、御勝手向経済掛の発言力が大きかっただけに、実質的には、両者ともに御勝手向経済掛の方針に従って管理運営されたものと推察される。しかもこうした機構の中で、伊達林右衛門が勘定奉行のみならず、御勝手向経済掛、産物会所掛、大坂蔵屋敷取締向掛などの重職を兼任している状況下にあっては、伊達の考えが大坂蔵屋敷はじめ産物会所の運営にも大きな影響を与えたものと思われる。

いずれにしても、この期の経済政策は、藩主はじめ家老・用人等の藩首脳部の積極的なリーダーシップの下で決められ、実践に移されたというよりは、勘定奉行をはじめとする勘定方の実務派役人及び伊達林右衛門を中心とする上層商人を事実上の立案者として決定・実践されたところに大きな特徴があった。先に、江戸詰用人柴田矢太郎と国元の掛役人、家老蠣崎将監と勘定奉行をはじめとする事務担当者との間に現実の方針をめぐって微妙な相違がみられ、その結果、森欽兵衛の目に「小田原之評定」「御家老様方并柴田様二者何分御都合能被成度御答二候得共、外方五尺ま申候」などとうつつたことをみたが、かかる現象も、おそらく上記のような事情と深くかかわっていたのであろう。

なお、森欽兵衛が建造した盛徳丸は、安政5年7月5日、城下松前で御用船として間尺改をうけているので、藤野家預りの藩船長者丸とほぼ同じような性格を有した船であったと思われる。間尺改によると、11人乗の弁財船で、長5丈8尺、巾2丈3尺8寸、深7尺5寸、此石 973石1斗8升、桎替4寸引 917石9斗7升、内50石用捨引素間尺 867石9斗7升、正味 694石3斗8升、宿近江屋忠右衛門となっている。⁽⁸⁰⁾盛徳丸の他同年御用船として間尺改をうけたものに降福丸（11人乗弁財船、素間尺 946石7斗5升、50石用捨引素間尺 860石3斗7升）がある。⁽⁸¹⁾したがって、盛徳丸、降福丸の2艘は大坂

蔵屋敷及び産物会所の運営を目的として藩の御用船として利用されたものとみられる。

以上の諸点に留意しつつ、次に松前藩領への米の流入と領主蔵米・東根領年貢米の関係、及び幕末における蝦夷地産物の流通と松前藩の国産物統制策・産物会所との関係について若干の検討を加えることとしたい。

b. 領主蔵米の調達と東根領年貢米

松前藩領への米穀の流入と領主蔵米との関係をみる場合、①、文化4年移封以前の商場知行制実施の時期、②、文政4年復領以降の商場知行制の廃止と擬制的蔵米知行制の実施時期、③、擬制的蔵米知行制の実施という点では②と基本的に変らないものの、藩領域が著しく縮小され、奥羽両国に飛地を領有した安政2年以降の時期、の3期に分けて考える必要があり、ここでの分析の対象は、テーマとの関わりから当然③の時期にしばられるが、この期の問題点をより明確にするため、とりあえず各々①・②期の特徴点を簡単に整理した上で、③期の問題を検討することにした。

①、文化4年移封以前の商場知行制実施の時期。

非米作地帯である松前藩にとって、米の移入が藩制成立当初から重要な課題になったことはいうまでもない。しかし、現在のところ、史料不足から近世初期の移入米や領主蔵米の実態については明らかにすることができない。大まかな数字ながら、一応その概要が把握できるようになるのは寛文期以降のことである。すなわち、「寛文拾年狄蜂起集書」⁽³⁰⁾によれば、「松前城下家数八百間御座候由、家中在地共に此兵糧壹年五斗入三万五六百俵斗入可申と申候、大圖の積り、在々にて入申兵糧は積り知れ不申由、然共在々迄に五万五千俵程も入可申敷と積り申候由」とあり、正確な数字とはいいがたいが、寛文9年前後頃の在々も含めた松前藩領への流入米は、約55,000俵程（5斗入俵としているので、石数にして約27,500石）であったようである。

ところで、当時松前藩は商場知行制という特殊な知行制度を実施していた。

商場知行とは、上級家臣に俸禄のかわりに蝦夷地の一定地域でアイヌと交易する権利を与えるもので、かかる知行制度を採用したのも、松前氏の大名知行権の性格が、他大名の如き土地の支配権ではなく、蝦夷地（アイヌ）交易の独占権を軸としていたからにほかならない。したがって、家臣の知行権もかかる蝦夷地（アイヌ）交易独占権の一部を分与されたもの、とみられるが、こうした制度の下では、藩主というまでもなく、商場を与えられた上級家臣（場所持という）も、手船又は雇傭船を利用してアイヌ交易に従事するのみならず、本州諸港との交易にも従事した。⁽⁴⁰⁾

したがって、商場知行制実施時期の松前藩の消費米は、大略領主蔵米、場所持給人米、一般漁民・町人消費米に分類でき、このうち領主蔵米は台所米・切米取（場所持以下の家臣）宛行米・アイヌ交易米・その他、場所持給人米は、給人飯米・アイヌ交易米・その他、という内容を構成している。ただし、場所請負制発生以降は、アイヌ交易を商人が代行・請負うため、領主蔵米及び場所持給人米に占めるアイヌ交易米の比重は著しく低下し、アイヌ交易米の大部分は、事実上商人消費米の内に含まれることとなる。

こうした点を考慮に入れて、この期の松前藩領への流入米と領主蔵米との関係を見ると、⁽⁴¹⁾「津軽一統志」に「^(松前矩広)兵庫殿蔵米毎年壹万俵御調被成候由」（傍注引用者）とあるので、領主蔵米は約10,000俵（5斗入とみて5,000石）で、全流入米の18%強を占めていたことになる。したがって、残りの45,000俵（22,500石）が場所持給人米、漁民・町人消費米ということになる。領主蔵米の用途別内訳は分らないが、当時の切米取は40～50人とされるので、仮に1人当り年間宛行米を20俵（4斗8升入）⁽⁴²⁾とすると、切米取宛行米は384～480石となり、領主蔵米に占める比重は、せいぜい8～10%にすぎない。したがって、残りの90～92%が台所米・アイヌ交易米となるが、天明6年頃の台所米は、年間2,420石と見積られている⁽⁴³⁾ので、この期の台所米は、2,000石未満であったことはほぼまちがいない。とすると、台所米を仮に2,000石とみても、アイヌ交易用米は2,520～2,616石となり、蔵米全体の50%以上

を占め、アイヌ交易米の比重が著しく高かったことを知ることができる。このことは、当時の藩の財政構造によっても裏づけることができる。寛文9年当時の領主財政は、主に藩主の御手船交易収入、鷹販売収入、沖の口百姓諸役金などによって支えられていたが、その内訳は、御手船徳分1,000~2,000両、鷹販売代1,000~2,000両、沖の口百姓諸役金 600両余となっていて、御手船徳分の比重がすこぶる高い。もっとも、この手船交易の収入は、単にアイヌ交易の収益のみならず、蝦夷地の直領商場—松前—東北・北陸諸港のルートに就航し、商場交易を結節点に、物成諸色の本州への販出と藩用米の本州からの販入という循環活動の総過程から生みだされたものではあるが、かかる収益の源泉がアイヌとの略奪交易にあったことは否めない。そして、このアイヌ交易で交易品として重要な役割を果たしたのが米だったのである。

ところで、松前藩は、寛文6年「冬國民飢、発福山倉粟及河海之腊魚山海之菜蔬、以賑貧民⁽⁴⁷⁾」という状態に襲われたことや、寛文9年シャクシャインの蜂起があったことなどによって、寛文7年から10年までの4年間、年々3,000石宛羽州酒田蔵米（酒井左衛門尉預り所物成の一部）の払下げをうけている⁽⁴⁸⁾。したがって、先の数字に信憑性があるとすれば、寛文9年前後には、松前藩流入米の10.9%、領主蔵米の60%は幕府の払下米で賄われていたことになる。この数字をみる限り、米の調達、特に領主蔵米の調達において幕府払下米への依存度が著しく高かったことになるが、さらに注目しておきたいことは、その払下価格が後代の幕領米の払下価格よりすこぶる高かったことである。寛文7~10年の払下価格は、1両に付1石4斗4升であったが、同期の大坂堂島正米相場は、1石に付、寛文7年銀53~55匁、同8年49~54匁、同9年60~65匁、同10年56~59匁、同11年44~50匁である⁽⁴⁹⁾。当時の金銀相場は、慶長14年の公定相場金1両=銀50匁より銀安の傾向にあり、ほぼ金1両=銀60匁となっていたと思われるので、これを基準に計算すると、払下価格は1石=銀41匁6分7厘となる。寛文7年の堂島正米相場との比では、11匁3分3厘~13匁3分3厘安となるが、寛文11年との比では、わずかに2匁3分3

厘～8匁3分3厘の差しかない。ところが、元禄9年以降の酒田における羽州幕領米の払下価格は、半分が4斗8升入50俵金10両替（金1両＝2石4斗）残り半分は最上領大山領平均5分1百姓金納値段というもので、定額分についてみれば、両者の間に金1両につき9斗6升の差がある。しかも、同期の堂島正米相場との関係では、元禄8年銀70～80匁、同9年105匁という米価の高騰時にあっても、⁶⁰1石＝銀25匁（元禄8年、金1両＝銀60匁が公定相場となる）にすぎないのである。

このように、寛文期には、飢饉ないしはアイヌの蜂起という特殊条件下とはいえ、領主蔵米の多くを高価な幕府払下米に依存しなければならなかったという事実は注目されてよい。そして、このことは、同期の米の供給地が、主に青森・鰺ヶ沢・秋田・酒田・新井方（新潟）に限定されていたのみならず、延享年間に至っても「越後・出羽・津軽より渡り申候、過半津軽より渡り申候、九月後ハ津軽青盛方へ斗渡海罷成候」⁶⁰とある如く、中でも津軽米への依存度が高かったこと、また、津軽米の多くは、領主蔵米の払下米とみられること、⁶⁰ところが、この津軽藩の蔵米は、上方廻米率が高く、青森・鰺ヶ沢における払米量には一定の限度があったこと、⁶⁰さらに、この期には、津軽米も含めて後代程の納屋米の流通が未だみられなかったこと、などの諸条件に大きく規定されていたものと推察される。

その後、松前藩は、元禄8年、津軽・秋田・南部地方の凶作により飢饉に襲われたのを契機に、翌9年以降羽州酒田に於て毎年4斗7升入3,000俵（1,440石）宛羽州幕領米の払下げをうけ、宝永5年以降は年々4,500俵（2,160石）の払下げをうけることになり（払下価格は前述の通り）、この酒田における払下米（羽州御払米・羽州買請米、または御請米という）は、以後安政元年まで続けられた。⁶⁰享保元年頃の松前藩領への流入米は、羽州御払米を含め32,160石余、延享2年頃は40,291石である。⁶⁰当時の領主蔵米がどれだけあったのか確かな数字は把握できないが、享保・延享期の領主直領商場の経営は、商場への派遣船数は前代に比し減少してくるものの、未だ商人の請負い

形態は発達せず、多くの商場は依然として御手船交易地となっていたこと、また、場所請負制発展期の天明期の試算で、扶持人宛行米 576石（1人4斗8升入20俵、60人分）、台所米 2,420石（但し、試算基準、1人1日1升、1年3石6斗、700人分という数字に従えば、2,520石となり、計があわないが、当面そのままにしておく）、合計 2,996石とあること、などから判断すると、領主蔵米は、ほぼ4,000石前後と推察される。したがって、この数字が一定の事実関係を反映したものであるとすれば、総流入米に占める蔵米の割合は、9.9~12.4%、領主蔵米に占める幕府払下米の比重は54%程度となり、寛文期に比し、総流入米に対する領主蔵米の比重が著しく低下していること、また、領主蔵米にあっては、幕府払下米への依存度が依然として高かったこと、などの諸特徴を内包していたことになる。

こうした傾向は、場所請負制の発展に伴ないより顕著になっていったようである。たとえば、天明年間の松前藩領の消費米は、56,700石（1人1日7合5勺、360日分、21,000人分）、アイヌ交易米10,000石、総流入米66,700石と見積られているが、⁶¹⁾当時の領主蔵米は 2,996石であるから、総流入米に占める領主蔵米の割合は、僅かに 4.5%となり、また、領主蔵米に占める幕府払下米の割合は、72.1%となる。もっとも、この試算は、実数より少々多く見積られているものとみられるが、天明期には、家臣の商場はいうまでもなく、領主の御手船交易地にあっては悉く有力商人の請負経営へと変質していたこと、したがって、領主にとってアイヌ交易米を確保する必要がなくなり、領主蔵米の主要な用途は、必然的に台所米や扶持人宛行米に限定されてくること、などの諸要因を考慮すれば、総流入米に占める領主蔵米の比重が著しく低下していったことは否定できないであろう。なお、移封直前の寛政年間の領主蔵米は、8,968俵（4斗8升入、4,304石6斗4升）で、内「買請米」（幕府払下米）4,500俵、「御廻着米買入」4,468俵で、⁶²⁾領主蔵米に占める幕府払下米の比重は約50%であった。

②、文政4年復領以降の商場知行制の廃止と擬制的蔵米知行制の実施時期。

文政4年の復領後、松前藩は、文化4年の移封時まで実施していた商場知行制を全面的に廃止し、蝦夷地及び和人地を総て直轄領とし、蝦夷地各場所を有力商人に請負わせることによって、請負人が上納する運上金や三湊における沖口諸役口銭収入をもとに擬制的蔵米知行制を実施した。『新北海道史』第2巻通説1は、この制度について「松前藩では復領後まず蝦夷地および和人地のすべてを直領とし、従来知行地として場所を与えられていた家臣に対しては、そのかわり米および金を支給することになった。……この制度は文政六年四月から実施され、百石二十両の割で半額は米、半額は金をもって三月・九月の二季にわたって支給する方法をとった。……徒士・足軽は切米取と称して扶持米（一人二両）を支給した」と説明しているが、現存する関係文書をみる限りでは、半額を米、半額を金で支給された例は見当たらない。⁶⁰たとえば、中書院席の近藤兎毛宛の知行御墨附（知行宛行状）には、

式百石高

右之通宛行もの也

文政癸未六年四月 御黒印

近藤兎毛

とあって、石高が明記され、その支給方法は「知行割式百石高、此金四拾両、内三月式拾両九月式拾両御渡」というもので、事実上金のみで支給されている。また、同じく中書院席の和田頼母（知行高 200石）にあっても、文政11年の例では、3月7日に「御宛行金式拾両」、9月13日に「御宛行金式拾両」が支給されているし、近藤家文書「見聞記」⁶⁰にも、

	六百石	（下國頼負 蠣崎将監）
知行割	八百石	（松前内蔵 蠣崎主水）
1, 高五百石		御寄合
1, 高三百七拾五石		准御寄合
1, 高式百石		中書院詰御馬廻
1, 高百五拾石		〔同席御医師

┌ 中之間御中小姓

1, 高百拾石 士席御先手組

右但高百石ニ付金貳拾兩ツ、三月九月兩渡（傍点引用者）

とあって、全額金に換算して支給しており、嘉永2年閏4月「御家中并御扶持人御宛行高」⁶⁷⁾にあって、3月9月に各々半額宛金で支給する旨記されている。もっとも、明治4年11月宛行高改正時の記録に、元高500石の「渡方」として、「金百兩・米百俵」とあり、金と米で支給したようにもうけとれるが、しかし、この場合の「米百俵」は、金100兩の他に与えたものなので、100石20兩の割で半額を米、半額を金で支給したという意味ではない。したがって、本来的な知行高そのものに関していえば、「半額は米、半額は金」で支給された事実はなかったものとみてよい。ただし、陸奥国伊達郡梁川への移封期間は、文化6年新たな知行制（蔵米知行制）が実施されて以来、寄合席から足輕に至る宛行高は米と金で支給されている。したがって、復領以降の知行制度の大きな特徴は、①、梁川移封期に実施した蔵米知行の経験をふまえて、知行高を石高で表示したこと、しかし、②、松前蝦夷地は非米作地であるところから、その支給に当っては、士席御先手組以上は、100石金20兩替、士席御先手組格医師及び古組徒士以下は1人扶持金2兩替の規準をもって全額金で支給したこと、の2点にあったといえよう。なお、各席別の宛行高を示すと表④のとおりである。

表 4 家中扶持人宛行高

	宛 行 高	金支給
御 寄 合	500石	100兩
準 寄 合	375	75
準 寄 合 格	300	60
中 書 院 席	200	40

	宛 行 高	金支給
同 格 医 師	150石	30兩
中 之 間 席	150	30
同 格 医 師	110	22
士 席 御 先 手 組	110	22

	宛 行 高	金支給
同 格 医 師	4人扶持、金10両	18両
古組御徒士	4人扶持、金10両	18
同 格 医 師	3人扶持、金10両	16
新組御徒士	3人扶持、金10両	16
同 格 医 師	2人扶持、金10両	14
町 下 代	3人扶持、金10両	16
内 下 代	(2人扶持、金10両) 4人扶持、金10両	(14) 18

	宛 行 高	金支給
同 格 医 師	2人扶持、銀8枚	10両
沖之口下代	4人扶持、金10両	18
古 組 足 軽	2人扶持、金10両	14
新 組 足 軽	2人扶持、金8両	12
足 軽 並	2人扶持、金6両	10
御 用 達	7人扶持、	14
町 名 主	2人扶持、金10両	14

100石＝金20両、1人扶持＝金2両、銀1枚＝金3分

近藤家文書「見聞記」(北海道開拓記念館蔵)嘉永二己酉年閏四月「御家中並御扶持人御宛行高」(『松前町史』史料編第1巻)による。内下代の()内は「見聞記」の記載高。

こうした知行制度のもとにあつては、領主蔵米の主要な部分は、原則として台所米が占めることになるが、家老・用人・勘定奉行・勘定吟味役・寺社町奉行・町吟味役・沖口奉行・沖口吟味役・江差奉行・箱館奉行(両奉行とも文政9年までは各々代官と称す)⁽⁷⁰⁾・両御側頭・目付・御用取次等の「御役料」や、寺院社人への「御寄附米」が米と金で支給され、かつ、各出先役所・番所の入用米はじめ非常用の御備米ないしは困窮領民への払下用米等を必要としたので、實際上必要とした領主蔵米は相当量に達していたものと思われる。当時、領主蔵米としてどれだけ必要としたものか、史料不足から正確な数字は把握できないが、天保3・4年には4斗入4,000俵(1,600石)を買上げており⁽⁷¹⁾、また、天保14年の領主買入米は、994石5斗8升8合5勺5才で、他に「羽州御買請米」が2,160石、両者で3,154石余になり、翌天保15年の買入米は1,148石9斗1升5合で、これに羽州払下米を加えると3,308石9斗1升5合になるので、当時の領主蔵米は、ほぼ3,000～4,000石とみられる。したがって、この期にあつても、領主蔵米に占める幕府払下米の比重が54～72%と非常に高かったことが判り、領主蔵米の調達にあたって、幕府払下米がいかに大きな役割を果たしていたかを知ることができる。

ところで、当時松前藩領への流入米はどれだけあったのであろうか。今これを知るべき確かな史料はないが、2・3の関係史料に記された数字を示す

と次のとおりである。天保9年頃の松前蝦夷地の様子を記した「蝦夷情実」には、松前城下12～13万俵、箱館8～9万俵、江差7～8万俵、計30万俵程とある。仮に4斗入俵とすれば、松前城下48,000～52,000石、箱館32,000～36,000石、江差28,000～32,000石、計108,000～120,000石ということになる。また、「近江藩蝦夷記録」中の「入米高調」に、天保14年36,624石、天保15年35,638石とあるが、これが松前藩領への総入米高なのか、それとも城下だけの入米高なのか判然としない。しかし、天保4年の城下における最低必要飯米量の試算（諸士市中まで10,795人、1人1日3合、360日分とみて）によると、11,658石6斗という数字がはじき出されているので、⁷⁰「蝦夷情実」の数値を考慮に入れると、おそらく城下への入米高を示したものとみられる。もし、こうした判断に誤りがないとすれば、天保期頃の藩領への総流入米は、ほぼ「蝦夷情実」の記す数字に近い量に達していたのではないと思われる。ちなみに、1人1日の飯米を3合とみて、人口との関係で必要最小限の飯米量を単純計算すると、文政5年66,903石8斗4升(61,948人)、文政11年70,223石7斗6升(65,022人)、天保5年73,290石9斗6升(67,862人)、弘化3年76,557石9斗6升(70,887人)となる。⁷¹

③、安政2年以降

安政期の領主蔵米に関する藩庁記録はなく、これまた正確な数字は把握しえないが、伊達家文書、安政三辰年十月「諸用留」の安政5年の項に次のような記述がある。

御米之覚

(安政3年)
辰年惣高

貳万五千四百五拾三俵余

(安政4年)
巳年惣高

貳万四千貳百五拾三俵余

(安政5年)
午年、越石御買入東根廻り共

壹万九千四百拾壹俵壹合五勺

外ニ

千四百三拾七俵余

（簡屋、近江屋忠右衛門）

イキ印⁵御買入ニ相成候得共、未御蔵入ニ不相成分

合式万八百四拾八俵余

壹ヶ年

式万五千俵之見込ニ致

差引

四千百五拾貳俵 不足

右七月四日之調子（傍注引用者）

この内容からして、伊達家に関わる米の量を記したものとは思えない。当時、伊達林右衛門は、勘定奉行兼御勝手向経済掛の地位にあるので、その数量や表現のあり方からして、むしろ領主蔵米量を記したものともみられる。したがって、仮に4斗入俵とすると、安政3～5年の領主蔵米は、安政3年10,181石余、同4年9,701石余、同5年8,339石余となり、当時年間必要蔵米は25,000俵、約10,000石と見込まれているので、安政4・5年には必要蔵米量に達していなかったことが判り、特に安政5年の不足が著しく、4,152俵、約1,661石余の不足を来している。先に、安政5年にあっては東根領年貢米の大坂廻米が全く行なわれず、その大部分が松前へ廻米されたことをみたが、こうしたことも、同年の蔵米調達事情と深くかかわっていたものとみられる。

ところで、当時東根領年貢米のうち、酒田への川下げ米はどれだけあったのであろうか。残念ながら、現在のところ各年毎の石数を正確につかめる史料は見当たらないが、東根村の「年貢皆済目録」⁽⁶⁸⁾（横尾家文書）を手がかりに、41ヵ村分の川下げ可能量を試算すると表5のとおりである。まず、東根村の小物成を含む米納年貢、内諸払米、実質米納年貢の推移をみると、小物成を含む米納年貢は、幕領期の文化6年は1,436石余、天保7年1,369石余であるが、松前藩領以降は、文久元年を除けば年々増加し、明治元年には約2,250石（村高の29.1%）に達している。しかし、この内本途物成の米納分は、こ

れとは逆に、天保7年の83.1%，安政6年の82.2%を除けば、文久元年の78.4%以外は、年々減少し、明治2年には、僅かに31.9%を占めるにすぎなくなっているので、安政期以降の米納年貢の著しい増大は、小物成の米納強化策によってもたらされたものであることが明らかとなる。

表 5 東根村実質上納米，41ヵ村実質川下げ可能米

(東根村・高7730石6233(m)，41ヵ村・高30641石2704(M))

	本達小物成 米納内分(a)	内本達分(b)	(b)／(a)	(a)の内払米、(c)	実質上納米 (d = a - c)	d / a	d / m	41ヵ村分実質 川下げ可能量(推定)
文化6年(1809)	1,436, 77445	1,027, 8750	71.5%	276, 27575	1,160, 4987	80.1%	15.0%	(4,596, 1905)
天保7年(1836)	1,369, 32110	1,137, 3520	83.1	409, 65710	959, 6640	70.1	12.4	(3,799, 5174)
安政6年(1859)	1,463, 25275	1,202, 0790	82.2	475, 36175	987, 8910	67.5	12.8	3,922, 0825
万延元年(1860)	1,658, 72575	1,156, 0760	69.7	646, 27675	1,012, 4490	61.0	13.1	4,014, 0063
文久元年(1861)	1,384, 49655	1,085, 4018	78.4	413, 24655	971, 2500	70.1	12.6	3,860, 8000
" 2年(1862)	2,048, 46305	1,324, 2113	64.6	917, 86985	1,130, 5932	55.2	14.6	4,473, 6254
" 3年(1863)	2,002, 15175	1,129, 0710	56.4	971, 57275	1,030, 5790	51.5	13.3	4,075, 2889
元治元年(1864)	2,157, 81345	1,239, 1327	57.4	1,090, 88545	1,066, 9280	49.4	13.8	4,228, 4952
慶応元年(1865)	2,091, 62575	1,068, 2070	51.1	1,170, 08555	921, 5402	44.1	11.9	3,646, 3111
" 3年(1867)	2,149, 92075	956, 3410	44.5	1,361, 10889	788, 81186	36.7	10.2	3,125, 4095
明治元年(1868)	2,249, 84575	996, 2370	44.3	1,746, 87314	502, 97261	22.4	6.5	1,991, 6825
" 2年(1869)	1,961, 98075	626, 7720	31.9	1,639, 82185	322, 1589	16.4	4.2	1,286, 9033

横尾家文書「年貢皆済目録」(山形県東根市、横尾新氏蔵)より作成、41ヵ村分実質川下げ可能量は、 $M(41\text{ヵ村} \text{高} 30641.2704\text{石}) \times \frac{d}{m}$

一方、諸掛用払米量も年々増加し、文化6年 276石余にすぎなかったものが、安政6年には 475石余となり、文化6年に比し約 200石近くの増加をみているのみならず、その後も年々急増し、明治元年では、遂に約 1,747石に達し、総年貢米の77.6%をも占めるに至っている。これは、主に置米、非常御備糧の増加と、東根陣屋詰役人への扶持米、役米及び拝借米の増加によってもたらされたものであるが、いずれにしても、この諸掛用払米が増加した結果、総年貢米に占める実質上納米の比重は年々低下し、幕領期の文化6年に

は、総年貢米の80.1%（村高の15%）に達していたのに、安政6年には67.5%（村高の12.8%）となり、明治2年には、僅かに16.4%（村高の4.2%）という惨澹たる状態になっている。もっとも、その比重は低下したものの、小物成を含めた米納年貢量が増大したこともあって、元治元年までは、絶対量では1,000石前後は維持していた。なお、文化6年の実質上納米1,160石4斗9升8合7勺は、総て「江戸御廻米」となっているが、天保7年では、959石6斗6升4合の内、230石1斗1升が「御廻米」、153石8斗9升が「松渡し」、575石6斗6升4合が「賣米」となっている。この「松渡し」とは、松前藩への払米のことであろう。

以上の諸点をふまえて、東根村の村高に対する実質上納米の比重を基準に東根領41ヵ村分の実質川下げ可能量を試算すると、表5の数値から明らかのように、元治元年までは、ほぼ4,000石前後になる。しかし、東根村は陣屋の所在地という関係上、陣屋及び陣屋詰役人関係の諸経費として地元で差引かれる分が他村よりはるかに多かったものとみられるので、東根村以外の各村の村高に対する実質上納米の比重は、東根村の例より少々高かったものとみてよい。こうした要素を考慮すると、実質川下げ量は、 $4,000\text{石} + \alpha$ というところであろうか。上原家文書「諸手扣」⁹⁹には、文久元年当時の「年々東根御収納米川下ヶ御廻米可相成見込」として、3斗7升入12,000俵、4,440石とある。この石数は、上記の事情からすれば、いわば最大可能量ということになろうが、その内「江戸御廻米」500石、「御沙汰次第地元御積立高」500石、「大坂御廻米」100石、「東根より御廻米ニ可相成分」（松前廻米分）として3,340石を見込んでいる。

ところで、安政年間の年間必要蔵米は、ほぼ10,000石であった。したがって、東根領年貢米のうち、酒田への川下げ米の総てを松前に廻漕したとしても、必要蔵米の44.4%前後を占めるにすぎず、半分以上は商人からの買上米で賄わなければならなかったことになる。ところが、実際には、文久元年の見込高からも窺える如く、川下げ米の総てを松前に廻漕することは不可能で

あったから、買上米への依存度はさらに高くなったことはいうまでもない。文久元年の廻米予定がそのまま実施されたとしても、同年には、東根領年貢米は、必要蔵米の3割程度を満たしたにすぎないのである。しかも、松前での米相場が、安政6年以降年々上昇したのみならず、家臣団への手当米の増加及び家中、在々拝借米の増加に伴ない、必要蔵米量が逐年増大する傾向にあって、蔵米の調達をめぐって藩側は大きな矛盾に遭遇していった。

たとえば、米相場についてみれば、安政6年12月場所請負人一同から提出された願書に「當年者早秋より米相庭引上ケ候ニ付、諸品右ニ順し高直ニ相成、市中一同不景氣申様も無御座、金銭融通向甚以不宜、私共一同取引向も差障當惑至極ニ奉存候⁽⁷⁸⁾」とある如く、安政6年秋から高騰し、安政5年4月1俵当り6匁8分～7匁1分であったものが、安政7年（万延元年）3月には、9匁8分～10匁1分、6月12匁6分、11月には12～13匁となった⁽⁸⁰⁾。また、慶応元年4月晦日の御達に、⁽⁸¹⁾

近年米穀諸色高直ニ付、御家中御扶持人共取續方可為難儀ニ而被思召、
（万延元年）
去申年以來諸士以下足輕共迄其年限御手當米御手當金等被下候得共、諸物価弥増引上り、就中衣服薪炭之類格外高直之趣ニ付而者、不一方可為迷惑旨御案事被思召、近来打續御入用御多端ニ而、御勝手向不御容易御時節二者候得共、追而物価先年江相復し候迄、御藩内一統江是迄定式拝借被仰付候御米被下置、猶部屋住之族江茂御定御宛行之外御米被下置旨被仰出候（傍注引用者）

とある如く、万延元年には、米穀諸色の高値によって大きな打撃をこうむった家臣団の生活を救うため、諸士以下足輕に至る各家臣に、所定の宛行以外の特別の手当米、手当金を支給したものの、物価高はやまず、家臣の生活苦は一層深刻なものとなった。そのため、慶応元年には、従来彼等に貸与していた“拝借米”の返済を免除さえている。諸物価の高騰に伴い、こうした家臣をはじめとする領民への貸与米が増加したが、文久元年の城下・江差両地における拝借米総高は、3,951石2斗と見積られ、その実績は、ほぼ3,340

石に達した。⁸⁰先の東根領年貢米の廻漕先別内訳は、実は、この拝借米に充当する松前廻米量を見込むために試算されたものである。したがって、こうした蔵米量の増大とその調達事情からすれば、文久元年、大坂廻米用として100石程見積られてはいたものの、この100石さえ果して予定通り大坂へ廻米されたかどうかとも疑わしく、むしろ、その大部分は、松前に廻漕された可能性が強い。

そして、こうした傾向は、その後一層顕著になっていった。表6は、慶応2年・慶応3年の必要見込蔵米量とそれに対する充当見込米を記したものである。

表 6 必要領主蔵米と充当米（見込）

	入 用 米		充 当 米	
	御 膳 米	200俵	御 買 上 米	200俵
慶 応 2 年	御 定 用 入 用 米	17,000	当寅年東根御廻米	11,800
			御 買 上 米	5,200
	江 差 御 入 用 米	2,400	東 根 御 廻 米	770
			御 買 上 米	1,630
	合 計	19,600	合 計	19,600
慶 応 3 年	御 膳 米	200	御 買 上 米	200
	御 家 中 定 式 被 下 米	6,700	寅年東根御収納米	6,700
	江 差 御 入 用 米	8,000	当卯年東根御廻米	800
			御 買 上 米	7,200
	熊 石 御 番 所 御 廻 し 米	2,200	御 買 上 米	2,200
	御家中・市在拝借米他御台所大部屋渡米	15,000	酒田并当所御買上米	15,000
	合 計	32,100	合 計	32,100

上原家文書「諸用留」（『松前町史』史料編第1巻）による。

慶応2年の場合は、拝借米は除かれている。まず、慶応2年の例では、必要蔵米19,600俵(4斗入で7,840石)のうち、御定用入用米が17,000俵(4,720石)で全体の86.7%を占め最も多く、次いで江差御入用米12.2%，御膳米1%の

順になるが、これに対する充当米は、東根御廻米が12,570俵(4斗入で5,028石)で全体の64.1%を占めて最も多く、残りの7,030俵(2,812石)が買上米で充当することにされている。また、使途別にみると、御定用入用米の69.4%が東根米、江差御入用米の32.1%が東根米で、東根領年貢米は、主として御定用入用米に充てられている。なお、慶応2年の場合、東根領年貢米の廻米量が12,570俵で、先の12,000俵(4,440石)よりオーバーしているが、これは、翌慶応3年の例から窺える如く、前年の年貢米を含めたもので試算していることによる。

また、翌慶応3年の例では、必要見込蔵米量が一举に32,100俵(12,840石)に急増している。これは、主に家中・在々拝借米他御台所大部屋渡米や熊石御番所御廻し米が新たに計上されたのみならず、江差御入用米の増加などによってもたらされたものであるが、これに対する充当米のあり方も、東根領年貢米が7,500俵(3,000石)、23.4%、御買上米24,600俵(9,840石)、76.6%となって、前年に比し東根領年貢米の比重の低下と買上米の比重の著しい増大という大きな変化がみられる。また、使途別の充当米をみると、御家中定式被下米(主に諸手当米と思われる)は総て前年の東根領年貢米で賄うこととされているが、江差御入用米では、8,000俵のうち7,200俵(90%)が買入米であるほか、御家中・在々拝借米他、熊石番所御廻米はいずれも総て買上米で充当することになっている。

ところで、東根領年貢米についてのみみると、慶応2年には11,800俵(4斗入で4,720石、3斗7升入とすれば4,366石)の松前廻米を見込んでいるが、これは、文久元年頃の川下げ見込米、3斗7升入12,000俵(4,440石)に匹敵ないしは、それをオーバーする石数である。したがって、慶応2年の数字は、従来の川下げ米の総てを松前に廻漕するものとみて計上した数字ということになる。しかし、同年の実質川下げ米は、表5から窺える如く、安政・文久期より下まわったことは明らかであり、しかも、当該年の年貢米を年内に松前に廻漕することは難しく、実際上はその大部分が翌年春に廻漕さ

れたことを考慮すると、慶応2年には、この見込み通りにはいかなかったものとみてよい。事実、慶応2年に松前に廻漕された東根領の年貢米は、8,700俵（4斗入で3,480石、3斗7升入で3,219石）にすぎないのである（表7参照）。

表7 入 米 高

	慶 応 元 年		慶 応 2 年		慶 応 3 年		明 治 2 年	
羽州御領より廻米	10,816俵	11.4%	8,700俵	9.6%	5,806俵	5.7%	8,857俵	16.0%
酒田・新潟等買上米			6,853	7.6	7,574	7.5		
広 東 米					3,672	3.6		
その他(買上米)	83,886	88.6	75,163	82.9	83,767	82.9	46,672	84.0
合 計	94,702		90,716		101,019		55,529	
平 均 値 段	15匁9分		33匁9分6厘		42匁6分4厘		33匁5分	

上原家文書「諸用留」（『松前町史』史料編第1巻）による。

ただし、明治2年は、正月より6月27日までの分で、「羽州御領より廻米」には、未着分550俵、「その他」には「御拝借米酒田ニ而御渡相成候得ハ、御積取可相成分」15,000俵を含む。

翌慶応3年の「御家中定式被下米」への充当米として、前年の「東根御収納米」が再び計上されているのも、こうした事情によるものであろう。しかし、同年松前に廻漕された東根領年貢米は、僅かに5,806俵（4斗入で2,344石4斗、3斗7升入で2,148石2斗2升）にすぎないので、慶応3年にあっても、この見込通りにはいかなかったものとみられる。

なお、慶応2年の松前への流入米は、90,716俵であるから、同年の領主蔵米は全流入米の21.6%、慶応3年では、31.8%を占めていたことになり、天保期に比しその比重が著しく増大している。ところが、先にみたように、それを充当すべき東根領年貢米の松前廻漕には一定の限度があったから、結果として必要蔵米の多くの部分を買上米で賄わなければならなくなる。この買上米の増加が領主財政に大きな負担となってはねかえていったことはいま

でもない。たとえば、慶応2年の試算では、東根領年貢米代、米1俵＝金1両に対し、買上米は1俵＝2両とされており、翌慶応3年では、前者が1俵＝金3両2分、後者が1俵＝4両1分で、各々1両及び3分の開きがある。⁸⁰したがって、こうした状況の下では、藩財政が一段と逼迫したことはいうまでもなく、慶応2年には、歳入112,242両に対し、歳出が122,567両で10,325両の赤字が見込まれているのみならず、翌年の赤字は更に増加し、歳入260,892両1分3朱に対し、歳出が330,594両2分2朱で、実に78,446両3分3朱に及ぶ赤字が見込まれていたのである。

以上の検討から明らかなように、松前藩は、安政2年以降、蝦夷地運上金の収入が途絶したこともあって、以後慢性的な赤字財政に見舞われるが、米をはじめとする諸物価の高騰にともなう家臣団への諸手当米・拝借米用の米の増大は、財政難とほうらはらに、必要蔵米を必然的に増加させることとなった。したがって、かかる状況下にあっては、藩側は米相場が上昇すればする程、東根領年貢米の松前廻漕を強化する必要に迫られる。ところが、この東根領年貢米は、現地における非常御備糧や置米、さらには陣屋詰諸役人の扶持米・手当米の増加に伴ない、酒田への川下げ米は最大限に見積っても4,400石余にしか達しなかつただけでなく、慶応元年以降は、酒田への川下げ米の量が一段と減少する中であって、藩側は、いきおい高価な商人よりの買上米で蔵米を賄わなければならないという大きな矛盾に遭遇していったのである。

こうした矛盾は、東根領の支配のあり方をも大きく特徴づけた点に注目しておきたい。表8は、東根村における本途物成分の年貢収納量の推移を示したものであるが、これによると、斗立に対する米納の比率は、幕領期の文化6年49.27%であったのに対し、安政6年以降は、慶応3年と明治2年を除けば、総て60%以上であり、文久2年には77.15%にも達し、平均65.8%と文化期よりすこぶる高くなっている。この間、東根領の百姓は、松前藩側に幾度となく石代納を願い出ているが、その大部分は、「御國表之儀者不毛之

土地ニ而、諸國入米無之候而者、御備筋其外御差支⁸³になるとの理由で許可されなかった。このことは、同表の石代納関係部分の推移に明確に反映されている。

表 8 東根村年貢収納量（本途物成分）

（村高 7.730石6233(m)）

	本途見取(a)		同斗立(b)		米納(c)		金納			
		a/m		b/m		c/b	定石代	臨時石代	願石代	御拂石代
文化6(1809)	1,973.2486	25.35%	2,086.006	26.98%	1,027.8750	49.27%	—	500.0000	558.1310	—
天保7(1836)	1,505.5533	19.48	1,591.585	20.59	1,137.3520	71.46	42.078	—	412.1550	—
安政6(1859)	1,640.6920	21.22	1,734.446	22.44	1,202.0790	69.31	42.078	490.2890	—	—
万延元(1860)	1,657.8120	21.44	1,752.544	22.67	1,156.0760	65.97	42.078	554.3900	—	—
文久元(1861)	1,545.7130	19.99	1,634.039	21.14	1,085.4018	66.42	42.078	506.5592	—	—
" 2(1862)	1,623.5590	21.00	1,716.334	22.20	1,324.2113	77.15	42.078	305.0447	—	—
" 3(1863)	1,628.1590	21.06	1,721.197	22.26	1,129.0710	65.60	42.078	550.0480	—	—
元治元(1864)	1,637.6470	21.18	1,731.227	22.39	1,239.1327	71.58	42.078	450.0163	—	—
慶応元(1865)	1,617.8370	20.93	1,710.285	22.12	1,068.2070	62.46	42.078	600.0000	—	—
" 3(1867)	1,578.2340	20.42	1,668.419	21.58	956.3410	57.32	42.078	570.0000	—	100.000
明治元(1868)	1,265.9740	16.38	1,338.315	17.31	996.2370	74.44	42.078	210.0000	—	90.000
" 2(1869)	1,247.5610	16.14	1,318.850	17.06	626.7720	47.52	42.078	650.0000	—	—

横尾家文書「年貢皆済目録」より作成

そればかりではない。慶応年間には「御収納米酒田買替」「買替米」と称して、酒田で米を買わせた上で、米納の強要さえしたのである⁸⁴。こうした諸側面をみるだけでも、松前藩が、現物地代＝米納年貢の収奪にいかにか執着していたかを知ることができるが、こうした支配のあり方も、結局のところ、前述のような藩の財政経済事情とそこでの蔵米調達をめぐる諸矛盾によって規定されたものであった。

いずれにしても、以上の検討から、安政4年、東根領年貢米の大坂廻米と販売を目的の一つとして大坂蔵屋敷が設置されたものの、東根領年貢米の大

坂廻米は、当初から困難な事情にあったことが明らかとなる。こうした中にあって、安政6年の3,000石、万延元年の1,500石の大坂廻米を行なった理由は定かでないが、安政6年の大坂廻米は、松前での米相場が急上昇する秋以前に行なわれているので、こうした米相場との関わりも一因になったものと思われなくもないが、翌万延元年も1,500石の廻米を行なっていることからすれば、むしろ、経済的要因よりは、藩の面目を維持するための政治的配慮という側面が強く働いた結果行なわれたもの、とみた方が妥当なのではあるまいか。しかし、文久元年以降は、家臣への諸手当米や拝借米が急増する中にあって、もはや、こうした政治的配慮を行なう余裕さえ生じえない深刻な状態に追いやられていったのである。柴田矢太郎の言を借りば、東根領の年貢米は、まさに「為御登無之も御藩中為筋ニ相成候義故、氣請ニ相拘り、為御登米之儀強而申立候事も不相成」状態にあったのである。

c. 産物会所の設置と国産物の直捌

安政2年の幕府の蝦夷地再直轄以降、松前藩は、財政経済事情の大幅な変化に対処するため、産物会所を設置したが、従来箱館産物会所の問題には早くから多くの関心が注がれてきたものの⁸⁰⁾、松前藩の産物会所については、その設置の事実さえあまり指摘されたことがなく、管見の限りでは、『新北海道史』第9巻史料3の「年表」中、安政4年の項の最後の行に、「松前藩、産物会所を設置。鰯・紫根等の買入れ、製造醤油の払下げを行う」とあるのが、この問題にふれた唯一のものである。しかし、前述の如く、松前藩が設置した産物会所の問題は、この期の松前藩の経済政策、とりわけ、大坂蔵屋敷の設置と国産物の流通政策との関わりをみる上で無視できない内容を含んでいるので、若干の検討を加えることとしたい。まず、主要な関係史料を示すと次のとおりである。

- ①、御領分中紫根之義、是迄百姓町人之内願出候者へ買入被仰付候得共、
当年も御直御買入被仰付、是迄之買入直段も⁸¹⁾ 壱匁直上ニ而御買入被成

候間、御扶持人妻子供者勿論、百姓町人者其時節ニ相成候ハ、掘出方致出精、御買入会所へ差出可申候、右之趣被仰出候間、御家中并市中在々共不洩様可相觸候、右之趣被仰出候間、此段相達申候

(安政4年) 88

巳正月

- ②、此節紫根掘取之時節ニ付、当春相觸候通、是迄之買入直段⁶者一割直上御買入被成候間、御扶持人妻子供ハ勿論、百姓町人共掘取方弥出精いたし、御買入会所へ差出可申候

巳五月

前条被仰出候間、此段相達申候

詰木石町

桜屋重太郎

右者紫根御買入会所被仰付候⁸⁹

- ③、兼而相觸候通、紫根之義御直捌ニ付、直段⁷割増ニ買入之處、追々出高も相進ミ候ニ付而ハ、土用中此上五分増都合⁸割五分増方ニ而御買入被成候間、弥出情いたし掘取、御会所へ差出候様可致候

(E) 90
子六月十六日

- ④、御領分中出産⁹錫之義、当年ヨリ以来産物會所御直捌被仰付候、尤直段之義ハ時々相庭ヲ以御買入可相成候、随テ他賣堅ク停止被仰付候間、万一密賣買等致候者有之節ハ急度御咎可被仰付候

1、右之通他賣買厳御差留ニ付、市中并東西村々漁方之者共、内々ハ商人共ヨリ当秋錫漁為引当前金借用致居候モノモ有之趣ニ付、右ハ此度限り會所ヨリ御下金被成下候間、当秋取上高ヲ以上納可致候

1、前段ニ付、是迄漁方之者共市中其外商人共ヨリ前金并米等借用致シ取賄罷在候者共難渋モ可致哉、依之其村柄ニ應シ漁事稼方日当高之割合ヲ以會所ヨリ御米金等前借可被仰付候

1、前段ニ付、若々¹⁰錫入用之者ハ、會所へ願出候得者、御拂可被成候右之趣被仰出候間、此段相達申候

巳七月

今般別岳之通被仰出候ニ付、当地商人其外共御料所八ヶ村并蝦夷地出產鰯之分ハ是迄之通御領分中出產鰯ニ紛敷取扱方迷惑モ可致候間、前段御料所出之鰯買受候者ハ、何村々之誰々ヨリ幾箇何十把買請候ト申義逸々書認届出可申候、随テ掛之者見当り相糺候節又ハ津出改之節、兼テ届出有之分ハ無構候得共、若届出無之品或ハ届出之高ヨリ員数相増候義有之候得者、本文ニ有之密賣買ニ候間、此段共心得違無之巨細届出可申候

但届方之義ハ追テ御買入會所御取極迄ハ町役所へ届出可申候
右之通相達候条、無洩可被相觸候

巳八月二日^{⑤)}

⑤、 口 達

昨巳年[㌥]以来年[㌥]紫根御直捌ニ付、是迄市中ニテ買請候直段江壺割相増^(用、脱カ)、猶土中者壺割五分之増方ニテ買入相成候得共、此度直段引上壺貫目ニ付錢三百六拾文宛ニ御買入ニ成候間、其旨相心得、最早時節ニモ相成候得者、精出堀取御買入會所万屋増藏方へ差出可申候、尤以来莖なしに致相納可申候

右之趣向[㌥]不洩様可被相觸候

(安政5年)[㌥]
午五月廿日

⑥、 乍恐以書付奉申上候

1、昨年[㌥]御產物御會所御取立、御製造之醬油御拂、猶又鰯紫根其外御產物御買入方御益筋ニ相成可申候得共、御艁者勿論、雇艁ニても他領江持出御拂被遊候儀者御損分勝ニ相見、地拂之方御徳用と奉存候、右ニ付御產物出増無之候而者不相成候間、在村江前金御貸付出精為致荷嵩ニ相成候様仕度、蝦夷地も相對を以買入申度奉存候

1、御當國江入塩大凡五万俵と見込三分御口錢之外壺俵江錢三拾文ツ、御役御取立之御趣意柄ニ被仰出候ハハ、右高ニテ千五貫文此金貳百貳

拾兩余御益ニ相成可申、御會所御取立之御趣意ニ者、年々定式御益之
 廉無之候而者相成間敷、人氣ニ差障候儀も無之哉ニ奉存候、右御差支
 無御座候ハ、御沙汰ニ相成候様仕度、此段以書付奉申上候、以上

午六月朔日

上田曾右衛門⁸⁸

- ⑦、惣社堂町并根部田村カ小砂子村迄之村々出産細芽昆布御産物會所ニ
 而御買入被成候、尤直段之義は、当年限り貳貫匁詰把ニ付百五拾文
 ニ御買入相成候間、胴結ニ仕立差出可申候

右之趣市中在々不洩様可相觸候

(万延元年)⁸⁹

申四月

- ⑧、惣社堂町并根部田村カ小砂子村迄之出産細芽昆布、御産物會所ニ而
 御買入之儀申渡候処、筒結仕立候ニ者、苜取方日延ニ相成候趣相聞候
 ニ付、當年御買入之儀ハ御止被成候間、市在仕来通勝手ニ賣買可致候
 右之趣今般被仰出候間、此段相觸候 以上

町御役所

申四月

御用達一同江⁸⁹

- ⑨、乍恐以口上書奉申上候

- 1、御製造醬油去巳年初て御仕込之品出来宜、夫カ年々石数相増御仕込
 ニ御座候得共、捌方早俄取前年御仕込之諸実翌年ニ至リ稔与相馴れ不
 申内絞出しニ付、味ひ不宜儀も有之、殊ニ御損分の場合も御座候間、
 御在来桶之外六尺胴返し桶拾本程相増御仕込ニ相成候得者、絞出し不
 都合之儀無之、石高程御益増ニも相成、永年御為筋ニ相成可申与奉存
 候、就而者御蔵ハ手狭ニて、此上桶数置場所等無御座候間、兼而御借
 上地之内余程空地御座候ニ付、御仕込品入置候御蔵四間ニ八間位ニ而
 一棟新規御取立、是迄穀物入置候御蔵江桶居置御仕込ニ相成候得者、
 諸実ニて惣石数八百石餘、年中醬油御拂高三百石程之見込ニ候間、可成
 御都合ニ相成可申与奉存候、尤御蔵御取立ニ付而者、御入用相嵩候得
 共、年々御利潤有之事故、御損分ニ者沢而相成申間敷儀と奉存候間、

此段奉申上候

- 1, 御仕込醬油一昨午年七月中より絞出しニ付, 御取締与して御蔵所江私家内引越被仰付, 是迄忝人ニて相勤来候得共, 病氣差合等之節御帳合向必至と差支候間, 外忝人被仰付候様仕度奉存候
- 1, 前断御仕込増ニ相成候而も, 人夫之儀者は迄之通ニて間ニ合候間, 働方之もの一同江盆暮聊御手當御座候様仕度奉存候
- 1, 是迄賣子之もの忝人ニて相廻り来候得共, 追々家数相増詰々醬油代取立之節不都合之儀も有之候間, 慥成ルもの老人御雇入被下, 兩人ニ被仰付候様仕度奉存候

申六月十八日

西村重蔵

石 太右衛門殿

伊 翁記殿⁽⁹⁶⁾

- ⑩, 去巳年以來紫根御直捌ニ付, 追々直増御買入被成候得共, 兎角出不足ニ相成候間, 若会所へ差出之手数を厭ひ, 致密賣候様之儀有之候而者以之外之事候, 就而者, 是迄之直段江猶又一割五分相増御買入被成候間, 弥掘取候分^(精)類出し, 御産物会所へ差出可申候, 尤在々ニ而掘取候分者最寄之名主へ差出可申候。

但し, 萬屋増蔵へ御買入方為取扱候得共, 以來御産物会所一手ニ御買入ニ相成候事

右之通今般改而被仰出候間, 此段相觸候, 以上

町御役所

(文久元年)
五月二日

両浜 一同⁹⁷⁾
受負人

上記の史料によれば, まず, 安政4年正月, 紫根の直買入れを目的に「御買入会所」を設置し, 7月には領内出産鰯の直捌を行ない, さらに, 同年中に醬油製造の直営と直売に着手(新組徒士西村重蔵が担当)したこと, また,

万延元年には、細目昆布の買入も計画したこと、(但し中止)等がわかる。なお、上記の史料でみる限り、買入産物は主に紫根と鰯の2品に限定されていたようであるが、森家文書「大宝恵」中の「蔵屋敷仲間賃銭定之事」に、大坂蔵屋敷取扱品目として、「廻米并雑穀類」とならんで「紅花・紫根・葉蓼・青苧」とあり、また、事実森歡兵衛は、紅花の売買にもタッチしているので、紫根の地に東根領産の紅花・葉蓼・青苧も買入の対象になっていたことはまちがいない。ただ、東根領産物の場合、その買入は、主に東根陣屋を拠点に行なっているの、国元の産物会所での主要な買入産物は、やはり紫根と鰯の2品であったとみてよいであろう。そこで、次に紫根と鰯の直捌をめぐる問題について、2・3検討を加えておこう。

〈紫根〉

松前藩が安政4年正月、紫根の直捌にふみきった直接的な動機が何であったのか、藩側の記録からは窺い知れないが、前年の安政3年、箱館奉行が薬種・紫根の直捌を実施したことが大きな要因になっていたものと思われる。すなわち、安政3年正月、「箱館御役所」から箱館付在々及び箱館付六ヶ場所の村役人宛に「其村々出産之薬種・紫根等掘獲次第箱館産物会所江可持越、相当之代料を以買上申付候間、其旨相心得出精取集可持参候もの也」⁸⁸とのお触が出され、翌安政4年5月には、「去辰正月觸置候処、右集方不宜候間、當年之儀者別而出精いたし、掘取次第取集人江可相渡、若他之者江直賣買致し候趣相聞候ニおみてハ、吟味之上急度旨申付候条、其旨相心得、等閑之義無之様可致者也」⁸⁹との厳しいお触が出されている。

もともと、この直捌は、箱館の場所請負人杉浦嘉七の積極的な提言によって実施されたもので、買入の実務も直接杉浦が担当した。弘化3～安政2年の箱館付在々の紫根の生産高は表9のとおりであるが、杉浦は、「是迄村々紫根寄方引請人之姿ニ而者、多分ニ取集不申ニ付、是迄之引請人も私手先江召仕、猶私手先之もの共薬草等心得居候ものも御座候間、右等へ申付精々為相勵出精仕候得は、餘程御有餘金も出来可申儀ニ奉存候」⁹⁰との考えを前提に

して、出産高を仮に 9,330貫目とすれば、1貫目銭 300文で買取った場合、

表 9 箱館付在々紫根出高

	生 (a)	干 上 げ (b)	b / a
弘化 3 (1846)	2,045. 450 ^匁	418. 350 ^匁	20.5%
〃 4 (1847)	1,950. 000	370. 700	19.0
嘉永元 (1848)	2,060. 000	410. 500	19.9
〃 2 (1849)	1,865. 300	363. 730	19.5
〃 3 (1850)	1,957. 550	391. 430	20.0
〃 4 (1851)	632. 730	126. 550	20.0
〃 5 (1852)	1,768. 500	344. 850	19.5
〃 6 (1853)	675. 300	136. 070	20.1
安政元 (1854)	1,651. 050	316. 280	19.2
〃 2 (1855)	2,632. 100	500. 100	19.0

安政 4 年「諸産物諸用留」（市立函館図書館蔵）による。

買入代金は銭 2,799貫文、金にして 411両 2分、永 117文 4分となり、干上げを生産高の「式掛ケ」（2割）とみると、販売用干紫根は 1,866貫目で、売値を 3貫目＝金 1両とみて、この代金は 622両になり、差引 210両 1分、永 132文 6分の利益が生じるものと試算している。¹⁰⁰つまり、杉浦の試算に従えば、売値は買入価格の約 1.5倍となるので、約50%前後のマージンが生じることとなる。もっとも、安政 4 年10月、杉浦が出荷した紫根は、317貫 880目にすぎないので、実際の生産高は杉浦が予想した程のはびず、従来の生産高と変らなかったものとみられるが、その売却価格は、90両 3分、永72文 8分であったから、当時の売値は、杉浦の試算にある如く、ほぼ金 1両につき 3貫目前後であったことはまちがいないようである。

こうした点からしても、安政 4 年、松前藩が紫根の直捌を行なった背景に、前年箱館奉行が幕領である箱館付在々及び六ヶ場所産の紫根の直捌を実施し

たこと、しかも、紫根の直捌には少からぬ利潤が伴うものと判断されたこと、の2点が積極的要因として存在していたことは否定できないであろう。特に、直捌を実施するに当って、従来の買入値段より一割増の値段で買取ることとしたのみならず、土用中には1割5分増とし、翌安政5年には更に引上げて1貫目銭 360文買とした上で、文久元年には、さらにその1割5分増の値で買上げるなど、年々買入価格を上げている事実は、藩側が紫根を利幅の大きい商品とみていたことを如実に示しており、したがって、中でも、その利幅の大きさが大きな要因になったものとみられる。紫根が利幅の大きい商品となったのも、野性の紫根を掘取って干し上げるにすぎないものだったからであろう。

しかし、現在のところ、史料不足から領内での生産高や出荷量、出荷額を知ることにはできない。ただ、森家文書、万延元年「日記帳」11月23日条に、

覚
五郎兵衛江相渡

1, 紫根 四箇

内

壹番皆掛目形 拾七貫目
貳番皆懸ヶ目形 拾六貫貳百目
三番皆懸目形 拾三貫四百目
四番皆掛目方 拾三貫六百目

右者大坂近江屋熊藏手船齊丸沖船頭与兵衛船積入為御登ニ相成候處、越前敦賀湊囲船ニ相成候故、同所より陸地差廻し候間、参着之砌、貫目相改御請取可被成候、依而案内状如斯御座候 以上

大坂

松前御役所

万延元庚申年

十一月十七日

(京都)
國領五郎兵衛殿（傍注引用者）

とあることや、同じく同家文書に、

- 1, 紫根 俵入八箇
- 1, 同 苦入十九箇
- 1, 同 込入老箇
- 1, 蕨包小もの 老ッ

✍

右之通藺ニ受取申候。

(安政6年ウ)
十一月十三日

槌屋伊助 ㊤

代嶋藏

覚

- 1, 紅花 拾八箇
- 1, 紫根 大小五箇
- 1, 蕨包 大小七箇

✍

右之通藺ニ請取申候 以上

(安政5年カ)
十一月八日

槌 伊 ㊤

とあるので、少なくとも毎年最低 100貫目前後の紫根が大坂又は敦賀経由で京都に送られていたことは確かなようである。なお、京都の國領五郎兵衛は、紅花・紫根の売買に関わる御用達商人である。

〈鰯〉

安政年間の松前蝦夷地におけるイカの漁獲高は不明であるが、明治20年代の北海道及び渡島国の漁獲高は表10のとおりで、渡島国が主産地になっていたことがわかり、中でも重なる産地が函館及び上磯郡で次いで松前、桧山・茅部の各郡となっていた。安政年間にあ

表10 イカ漁獲高の推移

	全 道 (a)	渡島国(b)	b/a
明治19	4,752石	3,805石	80.1%
" 20	1,700	1,218	71.6
" 21	1,882	1,168	62.1
" 22	3,270	2,795	85.5
" 23	5,604	5,302	94.6
" 24	3,332	2,438	73.2
" 25	3,007	1,784	59.3

『北海道庁統計総覧』による。

ことはほぼまちがいない。したがって、鰯の主産地もこうした地域であったことはいうまでもない。また、その主たる生産者は、和人地内の小零細漁民であった。蝦夷地の漁場を失った松前藩が、数ある海産物のうちで鰯を直捌の対象としたのも、このように、鰯の生産をめぐる諸条件が他の海産物とはちがっていたからであろう。

ところで、鰯の直捌を実施するにあたり、鰯の生産者に「内々ハ商人共ヨリ当秋鰯漁為引当前金借用致居候モノモ有之」状態に対処するため、秋の取上高の上納を条件に、彼等に会所より「御下金」を与え、かつ、村柄に応じ「漁事稼方目当高」の割合をもって「御米金等」の前貸を行なっていることに注目しておきたい。というのも、たとえ直捌の方針をうち出したところで、生産者が商人より仕込をうけている限り、産物会所への直集荷は不可能となり、直捌は事実上有名無実になってしまうからである。もっとも、生産者への資金の貸与がその後も継続されたものかどうか定かでないが、⑥の上田曾右衛門の上申に対し、安政5年7月8日に「上田曾右衛門出候鰯紫根其外御産物御買入之儀者、在村江前金御貸付荷高出増候様取斗可申⁽⁹⁶⁾」との御達が出されているので、生産者への資金の貸与は、それなりに行なわれたものと推察される。なお、「蝦夷地も相対を以買入」りたい、との意見に対しては、
「蝦夷地出産品御會所ニて直ニ御買入之儀差支候間、曾右衛門方ニて請負人等より一旦買入置、其後御會所江為賣上候様可被致⁽⁹⁷⁾」、また、塩の件については、「塩之儀ニ付申立候趣尤ニ付、御直捌之名目ニ致し錢三拾文宛直増御拂之積御評儀相成候得共、新役御取立ニ相當、御差支有之難被及御沙汰ニ候⁽⁹⁸⁾」との決定が下されている。蝦夷地産物の取扱いについて、正式に産物会所で直接買入れることをさけ、商人名義で買入れた上で、事実上は産物会所扱いにするという方法をとったのは、おそらく箱館産物会所との関係を考慮したからであろう。

ともかく、こうした経緯の中で鰯の直捌を実施していったが、安政6年10月、伊達林右衛門が藩庁に提出した書類によると、同年の両在における鰯取

上見込高は 2,000箇余(1箇70把)で、この買上額は、1把 129文買で18,060貫文、払い額が1把 150文売で21,000貫文、差引 2,940貫文の利益を見込んでいる。また、当初は、この 2,000箇の内 1,200箇を江戸に廻漕し、800箇を地払いにする予定であったが、最終的には総て地払いにされ、しかも、「御拂直段」は1把 159文と当初の予定より高かった。したがって、同年の買上鰯量が予定通りの 2,000箇だったとすれば、払い額は22,260貫文になり、差引 314,200貫文(1両錢6貫 800文替で金約617両余)の利益を得たことになる。この伊達家文書の記載内容からすると、産物会所で買入れた鰯は、安政6年頃までは、主に地払いか或いは江戸へ廻漕され、大坂への廻漕は少なかったものとみられる。

ところが、安政6年6月、箱館が通商貿易港として開港されたこともあって、翌万延元年からは少々異なった動きを示しはじめた。すなわち、同年江差近在産の鰯について「鰯捌方之儀、當年箱館廻船之積ニ有之候得共、今年ハ都而之産物類異人共江捌方果敢取不申候風聞有之候得共、右者取留候儀ニも無之、且箱館御用達共見込之様子申越無之候間、何分捌方疑惑仕候、依之近、同所江下代売人差立、同所捌方之様子篤と見聞為致、御用達共江厚く申談、見込為相尋候迄地拂成り又者箱館廻船成取究申度奉存候」との動きが見られはじめ、これに対し藩庁は「可為伺之通」との指示を与えている⁽⁹⁸⁾。また、同年8月には、箱館の杉浦嘉七・小林重吉から産物会所宛に次のような意見書⁽⁹⁹⁾が提出されている。

御城下御産物之儀奉申上候

- 1、當六月以来洋銀通用四ノ文程ニ直下ケ罷成、其後異船渡来無之故、交易品も市中商人共手配方見合罷在候得共、鰯之儀者唐方向方宜哉止宿異人共江申談候処、追、商船着次第買入致度趣申上候、右ニ付私とも見込之儀者、何連ニ仕候而も和船江賣渡候方却而御益筋ニ可相成哉ニ奉存候、就而者、御城下表ニおゐて御拂之儀當分御見合被遊、當方へ一手ニ御廻し相成候儀仕度、左候得者、外方も直段之差障も無之、

私共も十分直段取組方も宜精々相働御益ニ相成候様仕度奉存候間、前書錫之儀者、御取揃次第差向三百箇程も御差急御廻ニ相成候様仕度、此段奉申上候 以上

申八月

杉浦嘉七

代兵五郎

小林重吉

松前

御産物

御掛り中様

こうした動向からすれば、万延元年以降は、年々箱館廻しの鰯が多くなったものとみられる。

以上、断片的な史料を手がかりに、紫根と鰯の直捌の実態について検討を加えてきたが、以上の検討をふまえれば、両者ともにそれなりの実績はあげたものとみてよいであろう。しかし、その収益をみれば、そこには自ずから限度があった。たとえば、紫根は、生産コストが安かったため、それ自体は利幅の大きい商品になったことは確かとしても、生産高には限度があったから、総額ではそれほどの利益を生むことはできなかった。また、鰯は、安政6年に617両余の収益をあげ、総額では、紫根の収益をはるかに上まわったものと推察されるものの、両者合せても年間収益は1,000両に達しなかったものとみられる。弘化年間の東西両蝦夷地の運上金は24,087両1分、永100文であったから、かつての運上金収益にはとうてい及びえない微々たる額にしかならなかったのである。また、安政5年の沖口口銭収益、松前24,130両2分649文、江差9,712両1朱183文、計33,842両2分1朱832文と比較しても、その収益は僅かなものであった。

安政5年、産物会所手附上田曾右衛門の進言にもとづき、蝦夷地産物の買入に手を出したのもこうした事情によるものであろうが、しかし、それを実

施するに当って、上田名儀で買上げた上で、産物会所扱いという方法をとらざるを得なかったことから判るごとく、蝦夷地の各場所が幕領であるのみならず、安政4年、幕府が箱館産物会所を設置し、同年の箱館・江戸における会所の設置を皮切りに、翌5年大坂・兵庫、文久元年堺、文久2年敦賀・京都(売捌所)・松前⁰¹⁵、文久年間下関・新潟と全国の要地に産物会所を設けて、蝦夷地産物の流過程を把握し、流通課税を收取する、という状況下においては、蝦夷地産物の買入自体が非常に困難なことであった。しかし、それにしても、安政5年の段階で、こうした方針をうちだせたのは、蝦夷地が幕領になったとはいえ、松前が依然として西蝦夷地場所産物の集荷地になっていたのみならず、江差が江差在々海産物の集荷地であると同時に、西蝦夷地各場所での出稼漁民の漁獲物の集荷地にもなっていたからである。ちなみに、明治2年現在、松前・江差・箱館三湊における海産物の集荷高は、松前が西蝦夷地海産物17万石、江差が西蝦夷地出稼漁民の海産物7万石、江差在々海海物3万石の計10万石、箱館が東蝦夷地海産物13万石、箱館付在々六ヵ場所海産物3万石の計16万石と見積られている⁰¹⁶。

こうしたこともあって、松前藩は、文久元年5月10日、上田曾右衛門に「大坂御蔵屋敷江為御積登産物御買入懸り兼勤」を命じ、翌6月には、前述の如く「大坂御蔵屋敷江御廻米代りとして為御登可相成西地出産鯡類、御城下ニおゐて御買入方御手配之外、江差表ニても御買入」との積極的な方針をうち出したものの、これも「元ばやり」という要因も加わって、「五千石六千石目なと申産物為御登之御手配者辻茂出来不申」状態にたち至り、結局、翌文久2年には、大坂蔵屋敷の廃止という状態に追いこまれていった。

松前藩の産物会所が何年まで存続したものか定かではないが、産物会所設置の契機が紫根の直捌にあり、しかも、紫根の直捌は大坂蔵屋敷とセットの中で初めて機能したこと、また、伊達家文書に文久2年以降産物会所に関わる記録かみられなくなること、などからすれば、文久2年の大坂蔵屋敷の廃止に伴ない、事実上その機能は停止したものとみてよいであろう。

まとめにかえて

以上、森家文書を手がかりに、安政4年再興の松前藩大坂蔵屋敷の概要と運営状況をみた上で、同期の松前藩の財政経済政策と大坂蔵屋敷の関係を検討してきたが、以上の検討から次のことがいえそうである。

まず第1に、安政4年の大坂蔵屋敷の再興は、安政2年の幕府の蝦夷地再直轄による藩領域の著しい縮小と奥羽両国における飛地の領有という特殊な条件を背景としつつ、それによってもたらされた極端な財政難（その主因は、東西両蝦夷地と箱館の喪失にある）への対応策としての、産物会所の設置と紫根・鯛を主とする国産物の直捌、及び蝦夷地産物の売買を軸とした新たな経済政策の一環として行なわれたものであったこと。

したがって第2に、蔵屋敷再興の目的も、こうした経済政策を背景としつつ、飛地の一つである東根領の年貢米及び国産物の大坂廻漕とその販売におかれたが、東根領年貢米についていえば、領主蔵米調達をめぐる諸条件に規定されて、当初から大坂廻米を実施することは極めて困難であったこと。すなわち、松前蝦夷地はもともと非米作地帯であったために、領主蔵米は、当初から他領からの移入米に全面的に依存しなければならなかったが、その移入米は、幕藩制社会の構造的特質に規定されて、近世初期には、主として東北・北陸諸藩、中でも津軽藩の払下蔵米や幕府の払下米になったこと、近世中後期は、納屋米流通の発展に伴ない、東北・北陸諸藩の払下蔵米のみならず、納屋米の比重も増大してくるが、藩にとっては、払下げ蔵米・納屋米とも商人を介して買上げる「買上米」となるため、領主蔵米調達の経費は、必然的に米相場の動向に大きく左右されることとなる。そのため、元禄9年以降は、領主蔵米の大きな部分を価格が安く、かつ比較的安定した価格である幕府払下げ米へ依存しつつ、不足部分を買上米で充当するという体制がとられた。

したがって、こうした領主蔵米の調達のあり方からすれば、安政2年以降

(実質的には安政3年以降)の東根領の年貢米は、領主蔵米にとっては、従来の幕府払下げ米以上の重要な位置を占めることとなる。しかも、安政期以降、米価が年々上昇する中にあっては、かかる傾向が一層強くなる。したがって、かかる状況下では、たとえ一時的に大坂での米相場の方が松前相場より高いという現象が生じたとしても、原則的には、大坂に廻米するより、松前に廻米した方がより有利という状況におかれていたことは否定できず、その結果、東根領年貢米は、その大部分が松前に廻漕され、大坂廻米が行われたのは、安政4年 850石、安政6年 3,000石、万延元年 1,500石の3廻のみで、しかも、川下げ米の総量にほぼ近い石数を大坂に廻漕しえたのは、安政6年のみに終わったことである。

一方、国産物についていえば、大坂蔵屋敷の再興とほぼ併行して産物会所を設置し、紫根・鰯の直捌と東根領における紅花・葉蓼・青苧の買入れ、及び蝦夷地産物の買入れにも手をつけるなど積極的な政策を断行していったものの、このうち、大坂蔵屋敷に廻漕しえたのは、主として紫根と紅花であって、蝦夷地産物については、蝦夷地の幕領化と安政4年以降の箱館産物会所の設置による幕府による蝦夷地産物の流通統制という大きな壁にはばまれただけでなく、商人名義で買上げた蝦夷地産物も「元ばやり」という状況の中では、大坂に廻漕しうる海産物の量も極限られ、結果として、大坂蔵屋敷の運営を支えきれぬ程の国産物の大坂廻漕は殆んど実現できなかったことである。

したがって、第3に、その必然的結果として、文久2年には、ついに大坂蔵屋敷を廃止するとともに、産物会所の機能も事実上この年をもって停止したことである。

以上の点をふまえるならば、安政4年、松前藩は大坂蔵屋敷を再興はしてみたものの、当時松前藩の置かれた政治経済的条件からすれば、もとより、その運営は不可能なものであったとみることができよう。

註

- (1) 延享5年「諸国問屋并船宿」(『海事史料叢書』第8巻)によると、奈良屋九郎兵衛は、陸奥国問屋及び松前問屋8軒中の1人で、江差の関川家文書「永代御客帳」(宝暦六年5書抜)にも、「天神橋筋近江丁東へ入ル、奈良屋九郎兵衛様」とある。「用聞」としての奈良屋の業務がいかなるものであったのか定かではないが、領主蔵物(領主直轄商場交易品)の販売や必要物資の調達にあったものとみられる。ただし、領主直轄商場は、安永・天明期にはすべて商人の請負うところとなっているので、大坂の「用聞」の存在は、せいぜい宝暦期頃までであろう。
- (2) 高松市、瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵。
- (3) 「北門史綱」巻二(東京大学史料編纂所蔵)。
- (4) 市立函館図書館蔵。
- (5) 河野常吉資料「場所請負人及運上金」(『松前町史』史料編第3巻)。
- (6) 東京大学史料編纂所蔵。
- (7) 函館市中島良信氏蔵。
- (8) 上原家文書「万延元年・御扶持人名前」(松前町史編集室蔵)。
- (9) 森家文書「大宝恵」他による。
- (10) 尾関家文書「口達覚」(『酒田市史』史料編三)。
- (11) 森家文書、文久元年酉5月15日付、「長州下之関御達村屋吉左衛門」の森欽兵衛宛書状に「私儀先年5御願を以松前様御産物御取締方問屋被仰付候」とある。
- (12) 徳山久夫「讃州箱浦・多度津港の船問屋『勝間屋』—その松前・北海道との関係—」(『松前藩と松前』12号)。
- (13) 森家文書「大宝恵」。
- (14) 長者丸の航海日記については、別稿「『長者丸』航海日記〈解題〉」(『松前町史』史料編第3巻)を参照されたい。
- (15) 森家文書、「安政四載巳閏五月、竹内忠右衛門日記」。
- (16) 註(15)史料。
- (17) 伊達家文書「安政四年、行司諸用留」(北海道大学附属図書館北方資料室蔵)閏5月10日条に「町御役所御用、五三郎罷出候処、御船天神丸旧冬6大坂表ニおみて新規合船取掛り居候付、同所下り之折酒田浦ニ而東根御收納米積入差下し申度旨、當春江戸御屋舗6大坂御留守居齊藤様迄申越候得共、尔今何之様子も無之候ニ付、もし船頭甚五郎方6右等之趣問合書状も参着無之哉之段御尋ニ付、何儀も不参之趣御答申上候」とあるので、藩としては、当初伊達家の手船天神丸を用いて松前へ廻漕する予定であったらしい。
- (18) 宮本又次「大阪の蔵屋敷と御館入」(宮本又次編『大阪の研究』第4巻、清文堂)。
- (19) 田端宏「『帆船』についての考察—松前交易史の一側面」(『松前藩と松前』17号)。

- (20) 森家文書「大宝恵」。
- (21) 森家文書「大宝恵」。
- (22) 森家文書「大宝恵」。
- (23) 森家文書「大宝恵」。
- (24) 森家文書「大宝恵」。
- (25) 北海道大学附属図書館北方資料室蔵。
- (26) 森家文書「万延元庚申年，御在所 5 分荷為御登為替金元利調帳」(大坂御役所)。
- (27) 森家文書「万延二酉年二月，人馬駄賃帳」「文久元酉年三月，駄賃帳」。
- (28) 森家文書「万延元年九月吉日，日記帳」。
- (29) 「尼崎又右衛門請負座云々」とは，安政2年3月の「達」に「尼崎又右衛門一手取締寒天草并布海苔元草取扱會所之義，瀬戸物町大津屋平兵衛支配借屋借請，會所ニ取補理候趣ニ付而者，以來右元草廻着之度毎，又右衛門宅江申出候而手遠之儀も有之候間，右會所へ向相達可申事」(『大阪市史』第四下)とあるものであろう。
- (30) 林家文書「番日記」(『松前町史』史料編第2巻)文久元年5月23日条に，「松前勘解由殿当御領分中御名代として東西御廻浦被遊候ニ付，今日西在江御発足ニ付，当席 5 塩田作左衛門・名主川岸直左衛門，生符込上下着用罷出候」とある。
- (31) 林家文書「番日記」文久元年5月10日条。
- (32) 森家文書，国元の楠屋繁治郎他宛歿兵衛書状扣(「大宝恵」)。
- (33) 伊達家文書「安政三辰年十月，諸用留」。
- (34) 同上史料。
- (35) 同上史料。
- (36) 伊達家文書，安政3年「諸用留」，安政4年「行司諸用留」，安政5年「行司諸用留」，「北門史綱」巻二，法源寺文書「公宗用記録」(『松前町史』史料編第1巻)他による。
- (37) 註(33)史料。
- (38) 註(33)史料，林家文書「番日記」(『松前町史』史料編第2巻)文久元年4月19日条に「御松降福丸兼而御預ヶ被仰付置候処…御松御預之義御免被仰付被下置度奉願上候」との岩田屋金蔵の願書が記載され，4月20日条に「御松降福丸御松頭役仁左衛門水主共拾壹人乗，安政五午年六月認メ御往来御書替相成候ニ付，岩田屋金蔵 5 返納ニ付，御詰所へ差上候」とあるので，降福丸は岩田屋金蔵預りとなっていたことがわかる。
- (39) 『庶民生活史料集成』第4巻，三一書房。
- (40) 小林真人「藩主・藩士の手船所有と近世初期の松前海運」(『松前藩と松前』19号)。
- (41) 『新北海道史』第7巻史料1。
- (42) 「津軽一統志」巻十(『新北海道史』第7巻史料1)。
- (43) 天明年間の最上徳内の試算基準(「蝦夷草紙別録」<『松前町史』史料編第3巻>)によ

る。

- (44) 同上史料。
- (45) 註(42)史料。
- (46) 註(40)小林論文。
- (47) 「福山秘府」年暦部巻之5(『新撰北海道史』第5巻史料1)。
- (48) 「福山秘府」公用之巻上(東京大学史料編纂所蔵)。同史料によると、「天和元年北條新蔵殿江指出候書付」では「先年拝借羽州坂田御蔵米寛文七末年^ノ申西戌四年ニ都合一万二千石拝借仕候」とあるが、「公儀御牒之写一通」では「合老万五千四百五拾石」とあり、その後の記録では総て15,450石となっているので、実際の拝借米は、計15,450石とみられる。
- (49) 註(48)史料。
- (50) 本庄栄治郎『復刻徳川幕府の米価調節』柏書房。
- (51) 『日本経済史辞典』日本評論社。
- (52) 註(47)史料、中島家文書「松前年々記」(『松前町史』史料編第1巻)。
- (53) 本庄栄治郎、註(49)書。
- (54) 永井家文書「延享三年、申合覚」(別名「松前年代記」)。
- (55) 津軽藩の「御日記」(弘前市立図書館蔵)には、松前藩への蔵米の払下に関する記事が多く出ている。
- (56) 天和2年の「遠見鏡」(『敦賀市史』史料編第5巻)によれば、津軽越中守の敦賀廻米は年々1万石で、当時の津軽藩の石高は42,000石であるから、石高の23.8%に当る蔵米が敦賀に廻米されていたことになる。また、文政年間にあっても、東北諸藩の内では津軽藩の大坂廻米率(石高比)が高く、秋田藩20%、庄内藩21%に対し、津軽藩が33~40%となっている。(松本四郎「商品流通の発展と流通機構の再編成」<『日本経済史大系』4、近世下、東京大学出版会>)。
- (57) 「松前蝦夷記」(『松前町史』史料編第1巻)。
- (58) 註(54)史料。
- (59) 「蝦夷商賈聞書」(『松前町史』史料編第3巻)。
- (60) 最上徳内「蝦夷草紙別録」(『松前町史』史料編第3巻)。
- (61) 同上史料。
- (62) 「寛政十一己未年春蝦夷地御用之記」(「蝦夷国處置之記」所収、市立函館図書館蔵)。
- (63) この記述は、おそらく「蝦夷情実」(別名「北陸対問」)の「家中之知行并扶持米等ハ如何様之振ニ可有之哉、又家中ハ何人程可有之哉」の項に「七百石、松前内蔵、但右石は金式十兩之割を以^{半分米渡り}半^{分金渡り}金渡り」とあるのによったものであろうが、藩や家臣の記録をみる限りでは、これを裏づけることはできない。かつて、筆者も、この見解に従ったことがあるが(拙稿「松前藩」<『新編物語藩史』第1巻、新人物往来社>)、こ

こで訂正しておきたい。

- (64) 近藤家文書「由緒書」巻1・2（北海道開拓記念館蔵）。
- (65) 和田家文書「諸用記録」（『松前町史』史料編第2巻）。
- (66) 北海道開拓記念館蔵。
- (67) 『松前町史』史料編第1巻。
- (68) 松前家文書・無表題，元高・渡方・改正高・人員を記している（横浜市，松前之広氏蔵）。
- (69) 和田家文書「諸用記録」文化6年3月7日条の記述によると，寄合中（5人）は160石（物成35両1歩），内20両1歩金渡，15両米渡（4斗入48俵と1斗），準寄合中（4人）は140石（物成30両3歩），内18両金渡，12両3分米渡（4斗入41俵と1斗7升5合），「諸士御旧領ニ而場所持」（27人）は，5人扶持（金10両と米4斗入32俵2斗）「御旧領ニ而無支配」（5人）は，4人扶持（金8両と米4斗入26俵），医師は5人扶持（米4斗入32俵2斗），徒士（4人）は，3人扶持（金6両と米4斗入19俵2斗），内外足輕は2人扶持（金4両と米4斗入10俵2斗）というものであった。
- (70) 「蠣崎織人日記」（『松前町史』史料編第1巻）。
- (71) 近藤家文書「見聞記」。
- (72) 林家文書「町年寄日記抜書」（『松前町史』史料編第2巻）。
- (73) 「近江藩蝦夷記録」（北海道大学附属図書館北方資料室蔵）。
- (74) 証(72)史料。
- (75) 人口は，関山直太郎『近世日本の人口構造』吉川弘文館によった。
- (76) 山形県東根市，横尾新氏蔵。
- (77) 『松前町史』史料編第1巻。
- (78) 田附家文書「御觸書扣帳」（『松前町史』史料編第1巻）。
- (79) 伊達家文書，「安政三辰年，諸用留」。
- (80) 林家文書「町年寄詰所日記写」「番日記」（『松前町史』史料編第2巻）。
- (81) 上原家文書「諸手扣」（『松前町史』史料編第1巻）。
- (82) 同上史料。
- (83) 上原家文書「諸用留」（『松前町史』史料編第1巻）。
- (84) 同上史料。
- (85) 横尾家文書「御用留」，「羽州松前藩領百姓請書并御年貢石高歎願書類」，万延元年「書留録」（市立函館図書館蔵）。
- (86) 横尾家文書「寅御收納米酒田買替調帳」「寅御收納米酒田買替掛り書類」「卯御收納米酒田買替書類」他。なお，松前藩東根領の問題については，梅津保一「出羽国村山郡松前藩東根領について」（『松前藩と松前』2号・3号）に詳しい。
- (87) 松好貞夫「幕末及明治初年北海道産物の配給統制」（『経済史研究』22-2），宮本

又次「箱館産物会所」（『経済史研究』28-1），宮本又次『近世商業経営の研究』清文堂出版，永井信「箱館産物会所の性格と意義—幕末産業統制の破綻—」（『北大史学』第8号），白山友正「後幕領時代箱館奉行の箱館を中心とした開拓政策」（函館大学『北海道産業開発研究紀要』創刊号），守屋嘉美「幕府の蝦夷地政策と箱館産物会所—安政期幕政との関連で—」（石井孝編『幕末維新时期の研究』吉川弘文館），田島佳也「箱館産物会所の実態と特質—幕藩制解体期の商品流通—」（神奈川大学大学院経済学研究科『研究論集』第3号）などがある。

- (88) 湯浅家文書「湯浅此治日記」（『松前町史』史料編第2巻）安政4年正月16日条。
- (89) 同上史料，安政4年閏5月中条。
- (90) 法源寺文書「公宗用記録」（『松前町史』史料編第1巻）。
- (91) 「文政五午年以来抜書，沖ノ口法度」（北海道行政資料課蔵）。
- (92) 伊達家文書「諸用留」（安政3年）。
- (93) 同上史料。
- (94) 林家文書「町年寄詰所日記写」（『松前町史』史料編第2巻）。
- (95) 伊達家文書，安政7年「行司諸用留」。
- (96) 註(92)史料。
- (97) 田附家文書「御觸書扣帳」（『松前町史』史料編第1巻）。
- (98) 安政四丁巳年正月「諸産物諸用留」（市立函館図書館蔵）では「卯正月十一日」になっているが，前後関係からして「辰」年とみられる。
- (99) 「御觸書写」（市立函館図書館蔵）。
- (100) 註(98)史料。
- (101) 同上史料。
- (102) 福島屋文書「辰年より酉年迄會所惣仕上勘定并江戸大坂諸荷物調」（市立函館図書館蔵）。
- (103) 北水協会編『北海道漁業志稿』。
- (104) 註(92)史料。
- (105) 同上史料。
- (106) 同上史料。
- (107) 同上史料。
- (108) 同上史料。
- (109) 同上史料。
- (110) 「近江藩蝦夷記録」。
- (111) 註(92)史料。
- (112) 宮本又次『近世商業経営の研究』清文堂，には「下ノ関・新潟・松前にも設けられし如く」とあって，松前への会所設置の年月は明らかにされていないが，伊達家文書

「箱館方産物御會所日記」に、

御請書

今般松前表江御取立相成候産物御會所も蝦夷地請負人共江御貸金其度、箱館表も御金御廻シ相成候而者、村も継立方其外格別難渋も可仕ニ付、年々請負人共も箱館表江上納相成候蝦夷地御運上金、以来松前御會所ニ而御取立之上、私共兩人江御預相成、右を以為替御用相勤、御入用之節御差支無之様可仕段、并御會所江手代共之内ニ而差向兩人ツ、為相詰、日々御用向為取扱、并小使之ものも一同私共より差出可申旨被仰渡奉畏候、尤右御用金取扱候ニ付而者、金百兩ニ付銀五匁宛包分銀、并御會所江手代小使ども差出候ニ付、為御積登荷物高一百分一年々御手當与して被下置候旨被仰渡、是又承知奉畏候、依之御請書奉差上候 以上

戊九月十日

伊達林右衛門

栖原半六

とあるので、文久2年に設置されていることが明らかとなる。また、その設置も、「元仕入仕法」の実施を大きな契機としていたことがわかる。

(13) 「東西蝦夷地産物高并諸廻船積出税取立方見込申越」(市立函館図書館蔵)。

(14) 林家文書「番日記」(『松前町史』史料編第2巻)。

〈附記〉

小稿で使用した森家文書の調査に当って、瀬戸内海歴史民俗資料館専門職員徳山久夫氏に多大なる御協力を賜った。また、横尾家文書の調査では、山形大学名誉教授工藤定雄氏、山形県立楯岡高等学校教諭梅津保一氏、伊達家文書の調査では、北海道大学附属図書館北方資料室の秋月俊幸氏、吉田千萬氏に多大なる御協力を賜った。記して謝意を表したい。

経済学，常識入門

その 1

荒 木 秀 弥

はじめに

人間は、デジタル型とアナログ型の二つのタイプに分けられる、と云われている。

デジタル型の人間は、理くつつばく論理的思考を得意とし、理科の勉強に、特に数学的な考え方に適している人の事である。一方アナログ型の人間は、先ず直観的に物を考え、その後でその直観に色々な理由をつけていく、文科に適している人間である。

私は一般に理論的な物の考え方は得意ではなく、直観的に物を見る人間であるから、どちらかといえばアナログ型の人間である。

どちらの型が優れているかは価値判断が別れるところであるが、少なくとも学者と呼ばれる人は、このデジタル型の素質を最小限訓練して具え、同時にアナログ型の性質を合せて持っている必要がある。この意味では私は学者としては、失格であるらしい。

さて、経済学は非常にむずかしい学問であり高度に専門化された学問であって、一般の人々にはとうてい分らないものであると云われているが、又一方では経済学の智識はこれなしでは人間は一日も生活していく事が出来ない

ものである。

私は東京商大（現一橋大学）の学生であった時から、経済学はむずかしい学問ではあるが、又やってみると何となく面白い学問であると思って来た。又北教大に於ける15年以上と函館大学に於ける5年以上の間、一般教養（前期二年）の学生に対する経済原論の講議を通じて学生がここがわからないとか、ここがむずかしいとか云っている事と、前記の私の学生時代からの経験にてらして、経済学をもっとやさしく分り易いものに出来ないものかと云う夢を抱いて来た。

表題は私のこの念願を表わしたものであり色々な題目のものはそれぞれの間には何ら前後の脈絡もなく、全く関係がない雑文であってとうてい論文と呼べるものではないが、上に述べたように経済学を一般の人々に、もっと良く理解してもらいたいと云う私の念願の現われである。

1. マルクス経済学と近代経済学

日本の経済学者はマルクス経済学派か近代経済学派かのどちらかに分類され、又どちらかの学会に属さなければならないものとされている。日本の経済学もまたマルクス経済学とそれ以外の経済学即ち近代経済学の二つに分れ、仲良く共存して来た。このことは世界的に見て全く稀有の事であって、世界の国は西側の国々と東側の国々に分れて、その国の経済学者は全部どちらかの学派に属しているのが実情である。二つの学派がお互いに相手の学派の領域に踏み込まず、自分の領域を守って共存している国は日本以外には世界のどこにもない。

私の東京商大（現一橋大学）の恩師である故杉本栄一先生は、この二つの経済学を何とかして一つにまとめたと思って努力され、彼の名著である「近代経済学の触明」や「近代経済学説史」の中で、マルクス経済学を色々な学説の一つとして位置づけているのであるが、私もこの点では全く同感であ

る。

近代経済学者の一員としてマルクス経済学に対する私の所感を少し次のべてみたいと思う。

①マルクス経済学は哲学の立派な一理論ではあるが、経済学の理論としてはすでに学説史の一分野にすぎないと私は思う。

マルクスがあの有名な「資本論」を発表してからすでに 100 年以上もたっているにもかかわらず、彼の理論がいまだに尚人々の心を打っているのは、彼の経済理論体系が優れているからではなくて、彼の哲学理論即ち唯物史観が今もなを人々の胸を打つからである。彼の理論はヘーゲルの唯心論に対する反発として書れたものであって、哲学の理論としては大変優れたものであるが、経済理論としては今日の発達した近代経済理論からみればまことに幼稚なものである。

彼が「資本論」を発表してからすでに 100 年以上もたっているのに、依然として彼の経済理論があまり修正される事もなく、そのまま通用しているのは全く不思議であると云う他はない。彼の優れている点は、歴史的に経済の変動の姿を時間の経過と共にのべた事であり、又経済制度を批判した事である。即ち彼の経済学は資本主義経済の生成と崩壊の姿を刻明に述べているが、いわゆる近代経済学がその使命としている経済の運動の法則の解明やその応用として将来を予測すると云う科学としての役割を全く果す事が出来ないのである。

②マルクス経済学は経済の循環の姿即ち財が生産され交換され消費され、それが労働者階級生産者階級地主階級の間を、どの様に流れてそれぞれの階級の間でどの様に分配され又その分配された財がどの様に彼らの所得となって消費されていくかを我々に示してくれた経済学の一学派である。ケネーの経済表 (Economique Tableau) の中で始めて所得の循環の姿が明らかにな

ったのであるが、マルクスはこの財や所得の循環の姿を再生産表式を使って明らかにしたのである。

先ず彼は財を生産財（生産の為に用いられる財であって資本財とも呼ばれる）と消費財の二つに分け従って生産もⅠ生産財の生産とⅡ消費財の生産に分ける。

今 C = 不変資本（生産の過程でその価値を変えないで投入された価値がそのまま出来上った財（商品）の中に具現するもの）（機械類及び原料材料）， V = 可変資本（生産の過程でその価値が変化するもの即ち投入の時に出来上って商品になった時でその価値が変り使用者の搾取の対象となるもの）（賃金）， m = 剰余価値（利潤）， W = 商品（製品）とすれば、彼は先ず毎年同じ規模の生産をくり返す単純再生産即ち経済活動水準が毎年同じ規模で行われるものと、毎年生産の規模が拡大し成長していく拡大再生産の二つを考え、これらを再生産表式として次の様にまとめたのである。添字の $1 \cdot 2$ はそれぞれ 1 は生産財生産部門、 2 は消費財生産部門を表わしている。

$$\text{Ⅰ 生産財生産部門} \quad C_1 + V_1 + m_1 = W_1$$

$$\text{Ⅱ 消費財生産部門} \quad C_2 + V_2 + m_2 = W_2$$

この中毎年同じ規模の生産をくり返す単純再生産の条件は $C_2 = m_1 + V_1$ であり又拡大再生産の条件は $C_2 < m_1 + V_1$ である。

、例をとって述べると次の様になる。

$$\begin{aligned} \text{Ⅰ 生産財生産} \quad C_1 + V_1 + m_1 &= W_1 \\ 4,000 + 1,000 + 1,000 &= 6,000 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{Ⅱ 消費財生産} \quad C_2 + V_2 + m_2 &= W_2 \\ 2,000 + 500 + 500 &= 3,000 \end{aligned}$$

以上は単純再生産の例であってその条件は、

$$C_2 = m_1 + V_1$$

$2,000 = 1,000 + 1,000$ であった。又拡大再生産の例は次の様に今年の生産財生産の中今年の生産の為に使われなかった残りが来年の生産の為に用いられる

れるのであって次の様になる。

$$\text{I 生産財生産} \quad C_1 + V_1 + m_1 = W_1$$

$$4,000 + 1,000 + 1,000 = 6,000$$

$$\text{II 消費財生産} \quad C_2 + V_2 + m_2 = W_2$$

$$1,500 + 750 + 750 = 3,000 \quad \text{であって,}$$

拡大再生産の条件は $C_2 < m_1 + V_1$

$$1,500 < 1,000 + 1,000 \quad \text{であり,}$$

これらの不等号の意味は次の様になる。即ち左側の 1,500 と右側の 2,000 の差である 500 は生産財の総生産額 ($W_1 = 6,000$) よりもその今年の使用額が小さい分であって、今日の近代経済学の言葉で云えば貯蓄 = 投資 = 500 である。この事は今年の生産財の生産額 ($W_1 = 6,000$) が生産財の今年の使用額 ($C_1 (4,000) + C_2 (1,500)$) を 500 だけ上廻りそれが来年の生産に用いられる事を表わしている。従って来年の生産額は今剰余価値 (m ，利潤) が可変資本 (V) と同じだけ生ずるとすれば、この時生産財生産部門では今年の未使用分 500 は C_1 に 400 と V_1 に 100 分けられる。又消費財生産部門では 250 が C_2 に 200 V_2 に 50 分けられる事になる。即ち、

$$\text{I 生産財生産} \quad 4,000 C_1 + 1,000 V_1 + 500 m_1 + 400 C_1 + 100 V_1 = 6,000 W_1$$

$$\text{II 消費財生産} \quad 1,500 C_2 + 750 V_2 + 500 m_2 + 200 C_2 + 50 V_2 = 3,000 W_2$$

となる。従ってその合計は、

$$\text{I 生産財生産} \quad 4,400 C_1 + 1,100 V_1 + 1,100 m_1 = 6,600 W_1 \quad \text{となり,}$$

II 消費財生産 $1,700 C_2 + 800 V_2 + 800 m_2 = 3,300 W_2$ となる。この差である 500 は来年度の経済拡大の源泉となってそれらは大たい次の様に配分されると思われる。

$$\text{I 生産財生産} \quad 4,400 C_1 + 1,100 V_1 + 500 m_1 + 480 C_1 + 120 V_1 = 6,600 W_1$$

II 消費財生産 $1,700 C_2 + 800 V_2 + 400 m_2 + 320 C_2 + 80 V_2 = 3,300 W_2$ 従って再来年度の生産は次の様になる。

$$\text{I 生産財生産部門} \quad 4,880 C_1 + 1,220 V_1 + 1,220 m_1 = 7,320 W_1$$

Ⅱ消費財生産部門 $2,020C_2 + 880V_2 + 880m_2 = 3,780W_2$ となる。

以上の様にして一たん拡大のチャンスが与えられれば以後各年にわたって経済の活動水準は拡大していくのである。

以上がマルクスの経済循環の姿の概略であるが、マルクスの経済学には次の様に抜きがたい大きな欠点があると思われる。

③④マルクス経済学は 100年以上も前にマルクスによって作られた経済学であって、その後ほとんど進歩していない。一方マルクス経済学が主として分析の対象としている資本主義経済はその 100年の間に大きく変わっており、又その分析の対象となる様な純粋な資本主義経済は始めからかつて存在した事がなかったのである。従ってマルクス経済学は、今だかつて存在した事がない仮空の資本主義経済を分析の対象とする、仮空の経済理論であると云う事が出来る。

⑤マルクス経済学ではあらゆる生産物（商品）は生産財（機械類及び原材料）と消費財（食料・衣類・住居）の二つに分類され、従ってすべての商品はこれらの分類に従って生産財としてか消費財としてかのどちらかに用いられ、これらの両方に用いられる事は決してない。これに対してレオンチェフの産業連関分析の伝統を受けつぐ近代経済学ではすべての商品は始めから生産財と消費財に分類されてしまうのではなくて、あらゆる商品は時と場合によって生産財と消費財のどちらにも用いる事が出来るのである。たとえば米は消費財として直接に消費者によって食べられる事もあるが、又生産財として菓子や餅の原料としても使われる事がある。この様にあらゆる商品は生産財と消費財と云う二つの用途を持っているのであってこれが近代経済学の財に対する考え方である。マルクスは財の用途を生産財か消費財かのどちらかに限定してしまったのである。

⑥マルクスは剰余価値（利潤）を生み出すのは、生産過程における労働即ち可変資本（V）だけであると考え、彼の有名な労働搾取説を生み出す元と

したのであるが、近代経済学によれば循環剰余価値（利潤）を生み出すのは、賃金即ち可変資本（V）だけではなくて、経営者の資本を組み合わせる経営手腕からも生み出されるのであって、不変資本（C）即ち機械設備類及び原料材料もまた剰余価値（m，利潤）を生み出す元となっているのであると考えられているのである。

㊦マルクスは資本の有機的構成の高度化（ $\frac{C}{K}$ ）（Kは資本の総量即ちC＋Vである）即ち資本の総量（K）に対する不変資本（C）（機械設備類及び原料材料）の割合の増加（ $\frac{C}{K}$ ）はいわゆる機械が労働を駆逐して産業予備軍（失業者）を発生させると云っているが、資本の有機的構成（ $\frac{C}{K}$ ）の高度化は、いいかえれば労働装備率（ $\frac{C}{N}$ ）（Nは労働者の数）が機械類の増加によって上昇し、一人当りの労働者の機械設備がふえるので、労働者の労働生産性（労働者一人当り生産量）が大きくなって労働者の賃金が上がり生活水準の上昇につながると考えた方が良いのではなからうか。

③マルクス経済学の致命的な欠点は大たい以上の様なものであるが、マルクス経済学にも勿論非常にすぐれた点即ち長所がある。

その主なものは次の通りである。

㊦企業又は産業を大きく二つに分けて、我々に経済の循環の姿を分り易く示してくれたこと。

㊦経済の循環の姿が歴史的に時間の経過と共にどの様に変化していくか、又資本主義経済が制度的にどの様な欠陥をを持っているかを我々に示してくれた事。

の二つである。

2. ケインズ経済学の骨子

㊦先ず第一にケインズ経済学がその前の彼のいわゆる古典派経済学と根本的に異なる点は従来の経済学が生産主導型の経済学であったのに対して、ケ

インズの経済学は需要主導型の経済学であった事である。即ち従来の彼のいわゆる古典派経済学ではセイ (Say) の法則即ち「生産はそれ自からの需要を作る」とか「商品を買うものは商品である」と言う言葉に現われている様に、商品を生産すれば当然その生産から所得が発生しこの所得から出来上った商品に対する需要が生ずるのであって物によっては売れ残る商品も出るが、社会全体又は国家全体としてみれば、生産された商品に対する需要は必ず存在するのであるから、全体としての商品の売れ残りはないと言う事になる。これに対してケインズによれば、社会全体が不景気の時には、いくら生産しても需要がそれにともなわないので社会全体として商品の売れ残りが生じ、又失業者が発生するのである。1930年代の世界的な大不況の時には失業者は4人に1人と云う大量のものであったが、従来の経済理論によれば、商品を生産すればそれから発生する所得から、その生産された商品は社会全体としてみればあますところなく売られてしまうと云う事であるから、この世界的な大不況を救う道を見つけることは困難であって、只手をこまねいてなすすべもなくすわっているだけであった。ケインズはこの大量に失業者が発生している世界的な大不況を、何らなすすべもなく自然に回復するのを待つだけと云う従来の経済理論に反発して、1936年にあの有名な「一般理論」(General Theory of Employment, Interest and Money) を出し、その中で痛烈に従来の生産主導型の経済学を批判し彼の需要主導型の経済学を主張した。彼によれば大量の失業者が発生しているのはせっかく生産した商品が売れ残ったので、企業は大量の在庫をかかえて仕方なく生産を引きしめ人の首を切つてその為に失業者が発生しているのであるから、これをふせぐ為にはその商品に対する需要を政府が先に立って作り出す以外には方法はないと思った。

彼の理論によれば、雇用 (N) は生産 (Z) が増えれば自然に増えるのであるが、生産は需要 (D) によって左右され、需要がなければいくら物を生産しても社会全体として売れ残ってしまうのであるから、政府が先頭に立ってこの需要の冷え切った経済界をふるいたたせる引き金の役割りを果すべき

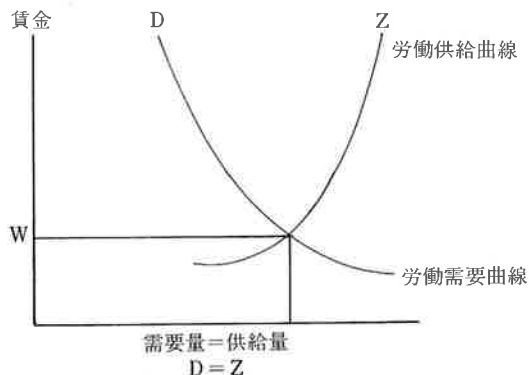
であると云うのである。

②ケインズの経済学の古典派経済学と異なる第二の大きな点は、その労働供給曲線の違いにある。即ち従来のいわゆる古典派経済学では、失業者は現在の賃金では安すぎて不満であるところから働かないのであって、賃金が上って彼が満足するだけ賃金をもらえれば働くと言う事になる。い、かえれば自発的失業者（賃金が安すぎるので自分の意志で働かない労働者）や摩擦的失業者（今迄の仕事から他の仕事に移る迄の期間仕事につけない労働者）の存在は認めるけれども、非自発的失業者（現在の賃金でも働きたいのであるが、需要不足から生産が増えず、止むをえず自分の意志ではなくて働けない労働者）の存在を認めていなかったのである。たとえば或る企業の製品に対する需要が、今迄は一日当り 100労働時間分の生産で充分にまかなっていった時に、その企業の製品に対する需要が増えた為に、今度は一日当り 120労働時間分の生産が必要になった場合、従来は $10時間 \times 10人 = 100労働時間分$ の仕事であったものが、従来の経済理論によれば $12時間 \times 10人 = 120労働時間$ と云う様に、10人の労働者の雇用は変らないで、一日当りの労働時間を延長する事によって、この企業の製品に対する需要の増加に対応するのであるが、ケインズによれば、現在の賃金でも働きたいと云う失業者が街にあふれているのであるから、一日一人当りの労働時間は従来通り10時間とし、労働者は二人新たに雇い入れて12人とすると云う事になる。即ち $10時間 \times 12人 = 120労働時間$ と云う事になる。今度は逆にその企業の製品に対する需要が落ち込んだ為に、その企業は一日当り80労働時間分の生産で充分にまかなえる場合、従来の経済理論によれば、一人当り一日の労働時間を8時間にへらして、10人の労働者の雇用は現在のままとする。即ち $8時間 \times 10人 = 80労働時間$ とするのである。即ち10人と云う労働者は好況不況にかかわらずそのままであり、労働時間を延長したり短縮したりしてこれらの需要の変化に應ずるのであっていわばいつでも10人と云う労働者を完全雇用しているのである。従って従来の経済理論は完全雇用理論と呼ばれている。

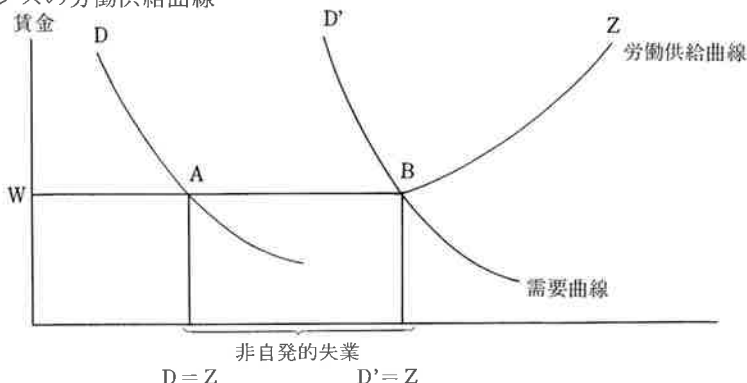
これに対してケインズによれば、その企業の製品に対する需要が落ち込んで、一日当り80労働時間分の生産でまかなえる場合、二人の労働者の首を切って10時間 \times 8人=80労働時間とすると云うのである。

この様にケインズによれば、雇用量を決定するものは生産量であるが、その生産量を左右するものは社会全体の需要量である。従って雇用量は間接的に需要量によって決定され、社会全体の需要量が不足する時には失業者（不完全雇用）も発生する事がある。要するに雇用量を決定するのは需要量であって、これを不完全雇用理論と云う。従ってケインズによれば、従来の理論は10人の労働者をいつでも完全にやとっているのであるから、完全雇用の状態だけを考えれば良いのであって経済理論のうちの完全雇用状態だけを分析する部分理論であるが、ケインズの理論は完全雇用の状態はもとより不完全雇用の状態をも分析の対象としなければならず、又不完全雇用の水準を決定しなければならぬので、従来の理論をも含む「一般理論」とであると主張するのである。従来の経済理論による労働供給曲線は、非自発的失業者の存在を認めないのであるから、始めから右上りの曲線となるのであるが、ケインズの経済理論では、非自発的失業者が存在する限り、労働供給曲線は横軸に平行であって、それらの失業者がいなくなると始めて右上り転ずる。従来の労働供給曲線とケインズのそれを図示すれば次の様になる。

①従来の労働供給曲線



㊦ケインズの労働供給曲線



③ケインズは経済の活動規模の変動に応じて変化する色々な変数のうち、人間の手で自由に操作する事が出来る変数を政策変数と名付けて、これを人間の手、特に政府によって自由に変える事によって不況を克服し失業を解消する事が出来るとして次の様に考えた。

先ず雇用量（ N ）を決めるものは生産量（ Z ）であり、生産量を決定するのは社会全体の総需要量（ D ）である。この総需要量はこれを消費需要（ C ）と投資需要（ I ）の二つに分けられる。（外国貿易を考えれば、これらの二つの需要に更に輸出需要（ E ）が加わるが、当分の間外国貿易は考えないでおく）これら二つの需要のうち消費需要の方は生産量即ち社会全体の所得（ Y ）に依存する所得の関数であって（ $C = C(Y)$ ），所得が大きくなれば消費もふえると云う様に所得の大きさによって決るのである。従って消費需要（ C ）は経済の循環の外部からこれを操作する事が出来ない内部変数である。これに対して、投資需要（ I ）（生産を増加させる為に必要な機械類の需要）の方は、その投資によって将来もうかるであろう資本の限界効率（利潤率） r と、その投資を行う為に銀行から設備資金を借り入れて支払わなければならない費用である利子率（ i ）を比較して、

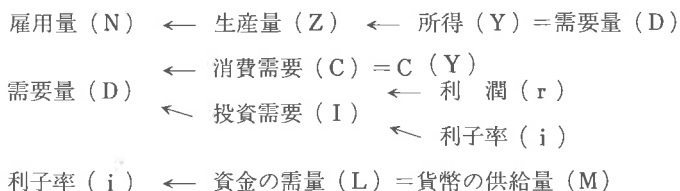
もしも利潤率（ r ）が利子率（ i ）よりも大きければ投資をふやし、

もしも利潤率（ r ）が利子率（ i ）よりも小さければ投資をへらし、

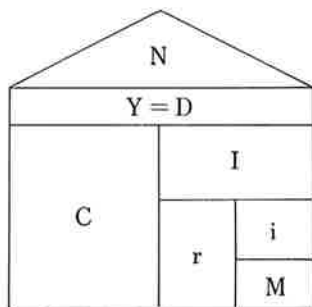
もしも利潤率 (r) が利子率 (i) と等しければ投資はそこで不変となる。

これらのうち、もしも利潤率 (r) が変らないとすれば、利子率 (i) はもしも貨幣の供給量 (M) がふえれば下り、もしも貨幣の供給量 (M) がへれば上昇する。この貨幣の供給量 (M) が人間 (特に政府) が自由に変える事が出来る政策変数である。

この関係を矢印で示せば次の様になる。

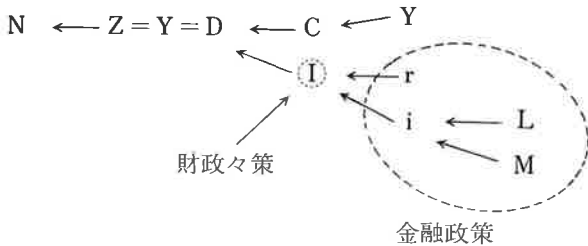


又上にのべた関係をラーナーのビルディングブロックモデルを使って現わせば次の様になる。



上の図から分る様に、雇用量 (N) と云う屋根を支えているハリは生産量 (Z) = 所得 (Y) = 総需量 (D) であり、その需要は社会全体の消費需要 (C) と投資需要 (I) の二つの柱に支えられている。この中投資需要の方は、資本の予想限界効率即ち利潤率 (r) と利子率 (i) との関数であって、もしも利潤率 (r) が一定であると仮定すれば、利子率 (i) が上昇すればへり、下降すればふえる。そして利子率も又貨幣の供給量 (M) の関数であってもしも貨幣の供給量がふえれば下降しそれがへれば上昇する。

この関係を先に書いた矢印で説明すれば次の様になる。



①金融政策によって失業を克服する為には、政策変数である貨幣の供給量（ M ）をふやし、それによって利子率（ i ）を下げて企業が銀行からお金を借りて投資（ I ）をふやし易い様にする事によって、その乗数倍の民間の生産量（活動水準）をふやし景気を回復させるわけである。

②これに対して、財政々策の方は、財政支出によって直接に政府が公共投資を行い、景気の回復の呼び水にして乗数効果によってその何倍かの民間の経済活動を活発にさせようとするものである。

この様に、政府が景気を回復させる為に行う事が出来る政策は、金融政策と財政々策の二つであるが、この中金融政策は政策変数である貨幣の供給量をふやし利子率を下げる事によって、間接的に投資をふやす事を目ざしているが、財政々策の方は直接的に政府が公共投資を行う事によって、その乗数倍の民間の経済活動を呼び起そうとするものである。

一般に金融政策と財政々策の二つは、政府（中央政府と日銀）が行う事が出来る主な景気回復の為の政策であって、これらは互いに補完的に行うべきであると云われている。

3. G.N.P.とN.N.P.

①G.N.P. (Gross National Product) とは粗国民生産高とか総国民生産高の略であり、N.N.P. (Net National Product) とは純国民生産高の略であるが、そもそも一般にG.N.P.とかN.N.P.は民間から誤解されている。即

ちG.N.P.とかN.N.P.は経済学上の言葉であって、一般常識で云う生産額とは異っているのである。

たとえば、自動車一台の生産高とは？と聞かれれば一般には150万円とか200万円と答えるであろうが、これは経済学上のいわゆる産出高の事であってG.N.P.とかN.N.P.とは全く別のものである。即ち経済学上では産出高＝生産高＋原料・材料費、又は生産高＝産出高－原料・材料費、であって経済学上の産出高とG.N.P.又はN.N.P.と云う経済学上の生産高とを感ちがいしているのである。例えば経済学上の自動車生産高とは、自動車産業が他の企業から買入れた鋼板・ガラス・プラスチック・ゴム等の原料・材料にどれだけの価値を附加する事が出来たかである。従って生産高＝俸給＋賃金＋利子＋地代・家賃の事であって、これらの合計は大たい自動車一台当り50万円か60万円にすぎない。従って自動車産業の自動車一台当りの生産額は一般常識的に生産額と考えられている金額よりも、大巾に小さくなるのである。例をかえてパン一食分の事を考えてみよう。農家では肥料や種を買って小麦を育てるが、そのパン一ヶ当りの農家の生産高は、例えば10円－5円＝5円である。この中左側の10円は農家が小麦を農協へ売った金額であり、－5円は他の肥料会社から仕入れた肥料や他の企業から買入れた種のように原料である。従ってパン一ヶ当りの農家の生産高は右側の数字である5円だけである。農協も又生産者であって、農協の生産高は例えば12円－10円＝2円である。この左側の12円は小麦を精粉所に売った金額であって、－10円はその小麦を農家から買入れた農協の原料に相当するものである。従って農協の生産高は右側の2円だけである。

次に農協から小麦を買入れた精粉所の生産高は、例えば30円－12円＝18円である。この式の意味は、製パン工場にパン一ヶ当りの小麦粉を30円で売ったが、農協から原料として小麦をパン一ヶ当り12円買入れたので、右側の数字である18円が精粉所の生産高である。次いで製パン工場の生産高は50円－30円＝20円であって、左側の50円はパンを小麦業者に売った金額であり、

－30円は原料として小麦粉を精粉所から買い入れた分である。従って製パン工場の生産高は経済学上は決して50円ではなくて、右側の数字である20円だけである。最後に小売業も又ヒックスによれば生産者である。先ず小売業者はパンを製パン工場から一ヶ50円で買い入れて消費者に一ヶ60円で売って利益を得るのであるが、小売業者の生産高は $60円 - 50円 = 10円$ である。この様に小売業者も生産者であるとは一般常識的に考えて全く変な事であるが、経済学上で生産とは、原料・材料に価値を付け加える事であって小売業者は製パン工場から買い入れたパンを消費者が買い易い様に消費者の好みに合せて並べているのである。従って小売業者は一般常識とは異って、経済学上では立派な生産者なのである。

パン一ヶの生産額とは、各段階の生産者が他の企業から買い入れた原料・材料に、それぞれの段階の生産者が付け加えた附加価値を全部合計したものである。上のパン一食分の例で云えば

肥料及び種代	5 円
農 家	5 円
農 協	2 円
精 粉 所	18円
製パン工場	20円
小 売 業 者	10円
<hr/>	
附加価値合計	60円

即ちこれは各段階の附加価値を合計する事による生産高の計算の仕方であるが、生産高の出し方にはもう一つの方法、即ち最終的な生産物（これ以上加工する必要がなく直接に消費者によって消費されたり、他の企業によって使われる機械類）だけを合計する事によっても得られるが、今日一般に経済学上では上にのべたそれぞれの段階の産業が生産に寄与した額即ち附加価値を合計する事によって生産高を得ている。

②N.N.P.とは前にものべたとうり、Net National Product の略であるが、G.N.P.との違いはG.N.P.から減価償却費を差引いたものである。Netとは何かを差引くという意味であるが、ここではG.N.P.から減価償却費を差引いてしまってこれを含まないと云う意味である。

減価償却費とは、機械設備や工場建物の様に一旦設備をととのえてしまえば、それ以後は何十年にも亘って生産の為に役に立つもので、その為にそれを設備した年に全額を経費として落してしまわないで、それが生産に役に立っている間に亘って徐々に経費として計上するものである。たとえば 200万円かけて設備した建物が以後20年に亘って生産に役立つ時には、この 200万円を一度にその年の経費としないで、約 1 割の20万円を残存価格とし、残りの 180万円は以後20年に亘って毎年 9 万円ずつをその年の生産の為に経費として落してゆこうと云うものである。生産高を計算する時には、本当はこの減価償却費を含まないN.N.P.で計算するべきであるが、減価償却費は税法上又企業によっても色々と計算の方法が異なるのでその真の姿をつかまえる事はむづかしい。税法上でも減価償却費の計算方法には二通りあって、一つは定額法でありもう一つは定率法である。定額法は読んでその名の通り毎年同じ額を経費として生産費の中に入れていく方法であり、定率法は同じ率を残った価額から差し引いて生産費の中に入れていく方法である。最終的にはどちらの方法をとっても金額は同じであるが、途中の段階では定率法の方が始めに大きく償却してしまい後になれば定率法の償却額はだんだんと小さくなっていく。企業がどちらの方法をえらぶかは、全く企業に一任されているので減価償却費の本当の姿を社会全体としてつかまえる事はむづかしく、従って $G.N.P. - \text{減価償却費} = N.N.P.$ と云う形でN.N.P.を計算する以外には方法がない現在、正確にN.N.P.を知る方法は我々にはない。従って真に不本意ながら我々は今知る事が出来るG.N.P.を使って生産高を推測しているのである。

おわりに

我々は上記の様に経済学をなるべく皆にわかり易い様にのべて来たつもりであるが，私の力が到らない為にまだよく理解出来ない人がいるかもしれない。しかしながらこの程度が私の力の限界であり不満の残る人には遺憾の意を表明する以外にはない。以下「その2」に於ては主に日本経済の現状把握を中心として，なるべくわかり易い様に又面白い様に書くつもりである。

第17輯 第1号 目 次

論 文

律令制の成立と海上交通

—日本交通史通論(3)—

.....和 泉 雄 三 (1)

過失法の機能的諸相(二)

—カナダ過失法に関するLinden教授の所論を中心として—

.....蘇 田 三千穂 (55)

研 究 ノ ー ト

ミンスキーのケインズ解釈について

.....外 山 茂 樹 (83)

執筆者紹介

榎 森 進 助 教 授

荒 木 秀 弥 講 師

(北海道教育大学函館分校助教授)



昭和57年 3 月31 日

函大商学論究

第17輯第 2 号

函大商学論究 編集委員会

編 集 者	委 員	永 野 弥三雄
	同	増 尾 久 徳
	同	河 村 博 旨
	同	外 山 茂 樹

函館市高丘町142番地

発 行 人 函 館 大 学 商 学 部

電話 0138-57-1181~3

函館市高丘町142番地

発 行 所 函 館 大 学 商 学 部

電話 0138-57-1181~3

函館市日乃出町23番15号

印 刷 所 株 式 会 社 大 栄 印 刷

電話 0138-51-5454 (代)

THE KANDAI SYOGAKU RONKYU

THE JOURNAL OF HAKODATE UNIVERSITY

Vol.17 No.2

March 1982

Articles

Problems on the *Osaka Kurayashiki* in Matsumae-han
(Matsumae clan) in the Last Days of the Tokugawa
Government

.....*Susumu EMORI* (1)

Notes

An Introduction to Commonsense of Economics (I)

.....*Hideya ARAKI* (77)

DEPARTMENT OF COMMERCE
HAKODATE UNIVERSITY
HAKODATE, JAPAN